

繪本通俗三國志

趙氏之妻樊氏

趙氏之妻樊氏

馬良字季常



馬良

韓當字公義

陳武字子烈

周泰字幼平



牙守

繪本通俗三國志目錄

○卷の二十二

周瑜計事を定めて荊州を取る
玄徳吳に入て孫夫人を娶る
錦囊の計事趙雲主を救ふ
孔明二度周瑜を氣死そ

○卷の二十三

曹操大いに銅雀臺に宴そ
孔明三度周瑜を氣死そ
孔明大いに周瑜を哭く
來陽縣に張飛龐統を薦む

○卷の二十四

馬超兵を起して潼關を取る
馬超大いに渭水橋に戦ふ
許褚赤裸にて馬超と戦ふ
馬超五將と歩戦そ

繪本通俗三國志目錄終

繪本通俗三國志卷の貳十二

○周瑜計事を定めて荆州を取

玄徳の荆州に在て兵を調へ呉の孫權が合淝の合戦に負て
國に回りたるおど物語し玉ふ所に孔明來り見へて曰く某
昨夜天文を見るに一ツの星西北の方に落たり必らず皇族
の内に死する人あらん玄徳大いに驚き玉ふ處に暫くあり
て人走り來り劉琦病重ふして亡びぬと告げれば玄徳聲を
放つて哭き玉ふ孔明が曰く人の生死は定れる數あり君必
ず愛ひ玉ふな只宜しく御身を保ち人を遣はして葬りを成
しめ代りて襄陽城を守らしめ玉ふべし玄徳の曰く誰をか
代らしめん孔明が曰く關羽に非せんバ悪くるべしとて即
時に關羽を襄陽城に遣しけり玄徳の曰く劉琦が死したる
由沙汰あらば呉の孫權又荆州を返せと云ん我如何答ふべ
きぞ孔明が曰く先に魯肅來りし時劉琦若世を辭せば必
ら老荆州を返さんと約束したる事あれバ此事聞へん定め
て來らん某宜しく答へを致すべし少しも御心を苦しめ

玉ふおとて二十日計りを遇ければ果して呉の孫權より魯
肅を使として劉琦の喪を吊ふと頼み孔明乃ち出迎へ城中
に入て賓主の坐定りければ魯肅乃ち禮をなし玄徳に向つ
て我國此頃劉琦の世を辭し玉ふと聞て主人孫權慎んで禮
物を具へ某を以て祭りを致さしむ周瑜も再三の禮意あ
りと云ければ玄徳坐を起て之を謝し酒宴を設けて持成玉
ふ時に魯肅申しけるは劉皇叔向に劉琦の世に在ん限り
は是荆州の主なりと宜へり今劉琦已に世を辭し玉ふ早く
荆州を我國に返し玉へ某専ら此事をやさん爲に來りた
り玄徳の曰く此事別に議論すべし先酒を飲玉へ魯肅又何
か返し玉ふべき必ず約を違へ玉ふなど云ければ孔明傍ら
に在て色を變つて曰く魯肅は何とて義理に通つ玉ふぬぞ
我主人懇ろに持成玉ふなれば心を静めて聞玉へ我宜しく
其本を説ん昔三皇五帝天を開き極を立てより以來天下の
一人の天下にあらざ乃ち天下の人の天下なり漢の高祖皇
帝三尺の劍を提げて白蛇を斬て義兵を起し玉ひてより四

百年の基を建て今日まで傳へれる處に不幸にして逆臣賊
ひ起り四海瓜の如くに分れ各々一方に據て心の儘に賦税
を收む然りと雖も天道若正しきを照さば豈又遂に正統に
版せざらんや我君劉皇叔ハ乃ち中山靖王の後にして漢の
景帝の玄孫今上の皇叔なり況んや劉表ハ我君の兄たり
弟として兄の業を承る誰か此を不可なりといはん汝が
君とする孫權ハ本是錢塘の小吏の子にして朝廷に功德あ
し今暴悪を放ま、にして江東の六郡八十一州を奪ひ取猶
慾心を息ずして刺へ荆州を呑んといふハ何事ぞ若君臣の
道を論ずる時ハ大漢劉氏の天下我君の姓ハ劉汝の君が姓
ハ孫只宜しく百畝の田地を請て農夫となるべし況んや赤
壁に曹操が大軍を破りしハ我君多く勳勞一玉ひ手下の諸
將よく命を用ひしによつてなり何を呉の國許りの力とい
はん若我東南の風を祈るにあらせんハ周瑜如何ぞ一寸の
功をも展る事を得ん江東若一度破れば二喬を銅雀臺に取
る、のみならず汝等が妻子といふとも保こと能ハト適よ

り我君の此事を答へ玉ハざりしハ御邊の高明なる才徳わ
るを以て必らず能察し玉ハんと思ひ玉ハ故あり御邊ハ元
より古今の道理に通ト玉ハ何ゆゑに浩る詞を出し玉ハど
と憚る處なく云けれハ魯肅道理に責られ斷く閉口して居
けるが良久して曰く孔明の詞怖くハ理に當らト某が身
の上便ならざる事あり先生人を損ふて己が爲を思ひ玉ハ
孔明が曰く御邊の身の上如何なる便の過き事かわるや
魯肅が曰く昔劉皇叔嘗陽にて曹操に破られ玉ハ一時
某孔明を伴つて呉の國ハ入主人孫權に兵を起させ其後
周瑜兵を起して荆州を取んといひしを某機々に諫めて
之を止め適に劉琦世を辭し玉ハハ必らず荆州を回さんと
約せしも又某が使ありハ機に某使を承りて今日
又始の約に背く時ハ主人の前に出て如何に口を開くべき
若今約を違へ玉ハ時ハ禍ひ忽ち起りて荆州の民隄炭の
苦みをうけ玄德公も千載の笑ひを得玉ハハ願くハよく
此事を思ひ玉ハ孔明が曰く曹操百萬の勢を引て虎狼の威

を腰ふと雖も我之を以て蟻の聚りたるが如しとす何ぞ周
瑜が如き小兒を怕れんや若先生の身の上便ならざる事
あらば我今劉皇叔を勸めて暫く荆州を借預り別に宜しき
國を攻取て其後に返さんといふの証文を書せて進らそべ
し魯肅が曰く何れの國を取て後我に荆州を返し玉ハん孔
明が曰く中國の急に關り難し今蜀の國ハ太守劉璋墮弱な
り我之を取んと欲す若蜀を取ハ其時に荆州を返すべし即
ち証文を渡しヤさんとて紙筆を取寄玄德自ら筆を染て名
字を寫し請人の諸葛孔明なりとて書了り玉ハひけれハ孔明
が曰く劉皇叔ハ我等が主人なり一家の証文ハ用ひ難し魯
肅も名字を書のせ玉ハと云て渡しけれハ魯肅が曰く某
素より玄德公ハ仁義の人なるを知よも詐りの宣ハトとて
自ら名字を寫し酒宴休で別れけれハ孔明自ら船の邊まで
送り御身よく呉侯に見へて然るべく荆州の事を云玉ハハ吳
侯若許容し玉ハハんハ我力なく兵を起して即時に呉の國
を奪ひ取ん只共に好を結んで曹操を滅さん事を願ふ偏へ

に御身の一言を頼む必らず曹操に笑ハれ玉ハなど云けれ
ハ魯肅遂に船を出し柴桑へ回りに周瑜ハ見へけれハ周瑜
が曰く如何に荆州を請取玉ハへるか魯肅が曰く玄德孔明が
証文あり周瑜開き見て足をそバだて、曰く御邊ハ孔明に
出し拔れ玉ハへり若荆州を借て蜀を取て後ハ返さんと云ハ
彼十年蜀を取ずんハ十年返さト然る時ハ何か荆州を吾手
ハ入ん殊ハ此証文を書せ刺へ御邊請人として己ハ名字を
書玉ハへり如何がして取返し玉ハんや主人若怒り玉ハ時ハ
御邊の禍ひ必らず九族ハ及ぶべしと責けれハ魯肅茫然と
して呆れ果顔色土の如くわあくと腰ひ証文を棄てけ
るハ玄德ハ心に誠ある人なりよも詐りハヤすまト周瑜が
曰く御邊ハ是眞實の人玄德ハ魯肅の輩孔明ハ森楷の徒
あり恐くハ御邊の心の如くならト魯肅が曰く然る時ハ如
何がせん周瑜が曰く我昔御邊の思を蒙り三千斛を借し事
安んぞ忘るべき必らず此度の禍ひを救ふべし心安く思ひ
玉ハとて數日過ける所に忽ち細作回り來り今荆州の城ハ

白き旗を揚て軍士皆喪の服をかけ城外より新しき墓を築けり
と告げれば周瑜驚いて曰く誰人か死たる其名を聞きや
答へて曰く玄徳の夫人甘氏病臥て亡びたり周瑜大いに
喜び急ぎ魯肅を呼んで予けるハ我計事成就せり玄徳を手取
よして荆州を忽ちに取ん魯肅が曰く如何なる故ぞ周瑜が
曰く玄徳が夫人近頃亡びたり幸ひ我君の妹孫夫人の生
付迄剛よして武勇を好み近侍の官女も盡く刀を帯す男
子と雖も及ぶべからず我書簡を以て呉侯に予し物馴たる
人を遣して媒せさせ玄徳と婚縁を結んで呉の國に賺しよ
び忽ちに擒にして獄中より囚置其上よて荆州を取回さん事
掌の中にあり然る時ハ魯肅の身の上自然禍ひなかる
べしと云ければ魯肅心喜び遂に書簡を受て南徐より行吳
主孫權に見へければ孫權問て曰く汝荆州の事如何致せる
魯肅曰く暫く荆州を借んとて玄徳孔明が証文あり孫權開
き見て予けるハ此の如くならべ何の時にか荆州を返すべ
き魯肅が曰く周瑜別に計事あり此書簡の如くにし玉ハ

荆州を取て手を反すよりも易からん孫權開き見て大い
に喜び誰を使として此媒をせさせんと思ひ急ぎ呂範を
呼んで曰く近頃玄徳が夫人病死せり我妹を以て玄徳を婿と
し永く一家の好みを結んで共々曹操を破らんと欲す汝も
非ずんば此媒をする者あらト願くハ荆州に行て此事を調
へいハ呂範が曰く君の尊命某何ぞ背くべし速かに行い
んとて一艘の快船に打乗直ちに荆州へぞ趣きける此時
玄徳ハ甘夫人病に臥て亡び玉ひしゆる日夜哀しみ哭き玉
ひけるが數日ありて呉の孫權より呂範といふ者使たりと
報じければ孔明笑つて曰く是又周瑜が計事にて荆州の故
ならん某ハ屏風の後に在て潜り聞べし君ハ彼と對面して
何事をすすとも先答へを成す客屋に留め置玉へ別に評議
して其後に回すべしと私語ければ玄徳乃ち呂範を呼入禮
了つて坐定りける時玄徳問て曰く御邊如何あるゆゑ有て
來り玉へる呂範が曰く某近頃皇叔の夫人世を辭し玉
ふと聞て共に好を結ぶの縁あるに因て媒を成ん爲す此

來れり玄徳の曰く我近頃妻を失つて肉猶未だ寒ならざる
に安んぞまア媒を望まん呂範が曰く人若妻おければ屋に
梁なきよ似たり豈中道にして人倫の禮を廢せんや我君
呉侯一人の妹あり容色世に勝れて而も大いに賢徳あり皇
叔の夫人に具へて共に秦晋の歡びを結ぶ時ハ曹操自ら滅
びて兩家共に和合せん必らず御心疑ひを成す速かに呉
の國に來り玉へ玄徳の曰く此事ハ周瑜一人の料ひなるか
又孫將軍の意より出たるか呂範が曰く若呉侯の命ハ非を
んば某何ぞ此來らん玄徳の曰く我已に五十ふ及んで
鬢髮衰白し孫將軍の妹ハ青春の妙齡何くんぞ配偶する事
を得ん呂範が曰く呉侯の妹身の女に生れたれども志ハ
男子に勝れり惜し天下の英雄は有ずんば夫とせまじとい
ひ玉ふ今皇叔ハ名四海に聞へて徳華夷ハ播す是所謂淑
女以配ニ君子といふ者なり何ぞ年を數へて嫌んや玄徳の
曰く御邊暫く客屋に入て休み玉へ明日事を定むべしとて
酒宴を設けて持成玉へる呂範ハ客屋へ入にけり玄徳其夜

諸大將を集めて此事を議し玉へ孔明が曰く某屏風の
後にて評に承り適に身を以て占をなしいに大吉の
兆を得たり君心を安んて此事を許容し先孫乾を呂範と
共に呉の國へ行しめ日を擇んで婚禮をなし玉へ玄徳の曰
く周瑜計事を設けて我を引誘て害せんとす安んぞ虎口の
危きに行べけんや孔明笑つて曰く誠ハ周瑜が計事とハナ
しなから争でか此孔明が計事に出入某一ツの質を以て周
瑜に計事を用ゆる事能はざらしめん孫權が妹を娶る時ハ
荆州いよく危き事なし萬某に任せ玉へとて玄徳の心
決せざりしかども孫乾を呼んで計事を授け呂範と共々呉に
行しむ

○玄徳呉に入て孫夫人を娶る
去程に孫乾ハ孔明が計事を受呂範と呉に行て呉主孫權に
見へ玄徳の意を述て禮を施しければ孫權が曰く我妹を以
て玄徳を招き一家の好みを結んとす何ぞ少しも詐りあら
ん若早く來り玉ふ時ハ此よ過たる大慶わらじ孫乾別れて

荆州に回り孫權懇ろに相待よしを語りければ玄徳猶心
疑つて更に決せま孔明が曰く我に三ヶ條の計事を定め書
寫して錦の囊に入置り御方の大將の内趙雲ならで此を
行ふべき人なしとて即時趙雲を呼よせ御邊今君の御供
やして吳の國に行此三ヶ條の囊を受けてよく次第に因て
開き見玉へ自然に宜しきに合ふ計事あらん若少しにても
此計事に背かば是君に忠なきなり趙雲が曰く某よく軍師
の命に従つて少しも背く事いへば孔明乃ち錦の囊を與へ
一切の禮物を關へて盡く備りければ建安十四年冬十月の
初め玄徳快船十艘のまを船へ趙雲を大將として五百餘
人此精兵を率ひ孔明を留めて荆州を守らせ吳の國へ下向
し玉ひけるが心の内快々として安からず船已に南徐の岸
に着ければ趙雲が曰く先に荆州を出る時孔明錦の囊を授
け次第よつて開き見るべしと云玉へり今已に此に來れ
り第一の囊を開かんとて看了りて大い喜び五百人の軍
士に計事を低語ければ皆こぞく々領承す元より吳の國

に喬國老とて平生至つて正直なる人あり乃ち二喬が父よ
して孫策周瑜が爲し舅なれば吳主孫權を初めとして諸人
ことく々仰ぎ尊ぶ趙雲岸に上ると伴しく玄徳を勤めて
羊を牽酒を擔ひ多く禮物を持せて先喬國老が家へ行て對
面して婚姻の慶びを告次に城中へ人を遣して着船の由を
報つけれと吳主孫權兼てより客屋を携へ媒の呂範を出
して持成し喬國老へ今日玄徳に對面して初めて婚姻の
事を知急ぎ宮中へ入て孫權が母吳夫人よ見へ浩る目出
度事やある御喜びをすそと云ければ吳夫人問て曰く我年
老たる寡なれば爾の命も料りがたし何事か有て喜び玉ふ
を喬國老が曰く孫夫人を以て玄徳を婿とし玉ふ事是に過
たる慶びのいひに玄徳已に此國よ來れり何とて某に知
せ玉ひぬ吳夫人驚いて曰く我曾て此事を知孫權を呼で
尋ね問へりとして人を出して其体を見せしむるに暫くあり
て其人回り今城中の体を見しよ玄徳の江の畔なる客屋よ
在て其邊車馬路を争ひ從ひ來れる五百餘人の軍士の處々

走り散て猪を買酒肴を求め皆好を結の事を語り荆州より
孫乾といふもの從ひ來り媒呂範と事を關へて客屋にて
持成り果して此事實にていを告ければ吳夫人以ての外よ
驚き心怪んで居たる所よ真ありて孫權來り見へければ
吳夫人胸を拍て大い哭く孫權問て曰く如何なる故に哭
き玉ふぞ吳夫人が曰く我年老たりと云ながらすまがふべ
くもあき汝が母なり何とて我を斯く蔑ろよする孫權大い
よ驚いて曰く是如何なる故よていぞ明かよ語り玉へ何と
てさほどに哭き玉へる吳夫人が曰く男子長なれば婚をな
し女子長なれば嫁しむ是古今の定れる理あり我は汝が
母あり汝若親と思ふの心あらば必先我に問て其後に致
そべきに初めより我に知せず玄徳を招いで婚とせんとす
女は是我女あり汝何を妄りに事を行ん孫權驚いて申け
る此事何方より聞玉ひし喬國老が曰く戀の事を云玉ふ
一國の人民たれか之を知ざる者あるや我數日以前に已に
知り此故に今慶びをす孫權が曰く是の周瑜が計事にて

荆州を取んとすれども若兵を起して争ふ時多く民塗炭
の苦みをうく此故に偽りて婚禮と号し玄徳を出抜て此處
へ招き密獄中に囚へて荆州を取回し若返さる時玄徳
を殺さんと料りし者あり之の慮しき計事にて更に實なき
事にてい吳夫人いよく怒つて曰く周瑜匹夫惜き已れぬ
吳の國八十一州の大都會として君の祿を費しおから荆州
を取程の計事を知せ却つて我女を餌として玄徳を釣よせ
て殺さんとす若然る時我女を誤るのみならず一生寡婦
たらしむべきか我老の命の絶ざらん問汝等如何にもし
て此計事をなしし喬國老が曰く若く様の計事にて荆州
を取天下の人に笑われん必らず此事を止玉へ孫權默然
として言を出さるりしかば吳夫人いよく怒り早く周瑜
を斬て棄此耻を雪くべしと躍り上りて釘りけり喬國老す
しけるは是程に隠れなき事を今更止べきにもあらず幸ひ
に玄徳の漢の天子の皇叔仁義四海の及ぶ乃ち實の婿とし
て長く一家の好みを結び浩る見苦き周瑜が計事の外に

聞へて人に笑れぬ様にし玉ふべし孫權が曰く玄徳の年已に五十に及べり争でか我妹に配偶せん喬國老が曰く劉皇叔ハ當世の英雄若婚とせば何ぞ年を數へて嫌ふ事をせん吳夫人が曰く我久しく劉皇叔の名を聞て未だ其人を見む明日甘露寺にて對面し我一目之を看て若心に合ひなば實に我女の夫となし若心に合はずんば汝等が望みの儘に任すべし早々に其用意をせよ孫權ハ素より大孝行の人なるゆゑ老母の此の如くなるを看て已事を得せしめて願承し退出して呂範を呼右の趣きを語りて明日甘露寺の方丈に酒宴を設け玄徳を招いで母に對面せさせよと云ければ呂範申けるハ其儀にていハハ大將買華に仰付けられ廻廊の陰に屈強の者ども三百人を隠し置吳夫人若玄徳を看て心に合はずと宣ハハ即時に殺して徹屋にし玉へ孫權然もべしと喜び買華を呼で其計事を命ず喬國老ハ我屋に回り使ひを以て玄徳に報ト明日孫權が母吳夫人甘露寺にて對面あるべしと云置しければ玄徳乃ち孫乾趙雲と此事を議し玉ふ

趙雲が曰く明日の會ハ凶多くして吉少なし某自ら五百の勢を引て從ひ行ん夜に入て媒の呂範來り明日甘露寺に出玉へと約し吳夫人並びに孫權對面あるべしと申ければ玄徳乃ち願承し夜已に明ければ身に細る蠟を被て表に錦の袍れを着し時刻今やと待玉ふ吳夫人喬國老已に甘露寺の方丈に出ければ孫權も數十人の大將を引て來り坐し呂範に命じて玄徳を招がしむ呂範客屋に行て玄徳を招ぎければ趙雲五百人の兵者を引ひ玄徳を守護して甘露寺に來り門前にて馬より下玉へハ吳主孫權ハ兼て法堂の前まで出迎へ玄徳を初めて看るに儀表俗を出て堂々たる威風あたりを拂つて看へければ心の内怕れ謹み前に近付て禮を施し引て方丈に入れれば吳夫人出て對面し玄徳を看て大いに喜び乃ち喬國老に向つて申けるハ是眞に吾婿あり喬國老が曰く玄徳ハ龍鳳の姿天日の表あり殊に仁義を天下に布て世の人之を仰がすといふ者おし夫人幸ひに活る婿を得玉へり是に遇たる大慶あらんや玄徳拜謝して共に



酒宴を成ける所に暫くありて趙雲劍を帯て出來り玄徳の側らに立ければ吳夫人問て曰く是如何ある人ぞ玄徳の曰く常山の趙雲と申す者あり吳夫人が曰く昔當陽の長坂にて阿斗を救ひし趙子龍あるか玄徳の曰く是あり吳夫人が曰く眞に絶れたる名將なり酒を賜へと云ければ趙雲拜謝して酒を飲密かに玄徳に低語て某今此邊りを看まハハ廻廊の陰に兵者を大勢隠し置たり是直事にていハハト早く此由を吳夫人に告玉へと云ければ玄徳即ち吳夫人が前に跪き哀んで告て曰く某を殺さんとの御心にていハハ明かに今此所にて殺し玉へ吳夫人驚いて曰く何ぞて活る事と云玉ふぞ誰人か我婿を害とべき玄徳の曰く廻廊の陰に兵者を隠し置たるハ某を殺その計事にあふせして何ぞ吳夫人怒つて孫權を責てやけるハ我今日玄徳を以て婿とす何故に兵を伏て害せんとする孫權答へて曰く某曾て此事を知定吳夫人いよく怒り呂範を召て問ければ呂範が曰く某何を活る事をせん定めて大將買華が所爲か

らん吳夫人急に買華を呼何何なる故に兵者を伏たりと問
へバ買華黙然としてもの云を吳夫人大いに怒り斬て棄て
よと云けれバ玄徳の曰く若今大将を殺し玉ふ時の大慶の
妨げとありて某久しく此に留る事を得と喬國老乃ち買
華を退出しけれバ廻廊に隠れたる兵者ども皆頭を擡へて
鳳の逃るが如くに走り散る見苦しかりける形勢あり斯て
酒宴敷刻に及びけれバ玄徳殿前に立出庭に大いある岩お
りけれバ從者の帶たる劍を抜き天を仰いで斬念し我若再
び荆州に回りにて霸王の業を成事を得バ今此岩を砍んに忽
ちに兩段とあらん若此所にて死べくんバ岩少しも砍まじ
と祝して礮と砍玉へバ火の光迸り出て其岩ニツとある
孫權の後に起て此体を窺ひけるが岩の砍たるを見て玄徳
何故に此岩を恨み玉ふと問けれバ玄徳驚き後を顧みて曰
く我年已に五十に及びたれども國家の爲に叛逆の輩を
誅して民の苦ミを救ざるを恨とす今此國に來りて婿とあ
り一家の好みを結ぶされバ共に力を合せて曹操を滅さん

事を喜び天に謝りて占を占し若曹操を誅して漢の天下再
び興るべく此岩ニツに砍んと云て砍たれバ今果して此
の如しと答へ玉ふ孫權之を聞て玄徳の言必ち詐りを以
て我を欺くものあらんと思ひけれバ乃ち又劍を抜きて
るハ我も天に謝りて占を占し若曹操を誅して漢の天下再
バ此岩砍て兩段とあらんとして心の内にハ密かに斬念し若
再び荆州を取事を得べくんバ此岩砍てニツと成んとて祝
しりて礮と砍バ其岩又ニツと成こそ不思議されされバ
此岩後の世までも遺りて十字紋の恨の石として今に在とぞ
承ハる玄徳孫權又内に入て酒を飲み時已に移りけれバ
孫乾屹と目合するに玄徳其意を悟り乃ち孫權に向つて某
大いに酔て座に墜がたしと云玉へバ孫權自ら引て門外に
立出山水の風景を望みけれバ玄徳大いに稱嘆して是乃ち
天下第一の江山ありと云玉ふ是よりして甘露寺の門に天
下第一江山といふ額をかけて後の世までも傳れりとか
や玄徳暫く門に立玉ふ所に江水天に漲り白波風に激して

雲の飛が如くあるに遙の漢より小船一艘馳來り恰も平地
を行が如くありしかバ覺へず噴トて南方の人ハ能船に乗
北國の人ハ能馬に乗と世の談にやすも實にてはと云玉へ
バ孫權心の内に玄徳の言の端南方の人ハ船ばかり得て馬
に乗得じと我を嘲るならんと思ひ左右の者を呼で馬を引
寄鞍の上に飛のり鞭を加へて山を走り嶺を越往來馳騁一
て如何に南方の人馬に乗事を知まじきかと云けれバ玄徳
も又馬に飛のり二人轡を双べて坡の下に立鞭を揚て快よ
く笑ひけれバ後の人此坡を駐馬坡と名付たり其後玄徳と
孫權と馬を双べて回りけれバ南徐の人民之を看て稱賀せ
ずといふ者おし玄徳ハ容屋に回りに孫乾と事を議し玉へ
バ孫乾が曰く君只喬國老に告て早々に婚禮をなし玉へ玄
徳之に従ひ次の日行て喬國老に見へて此國の人我を害せ
んとする者多し我久しく留る事能ハじと云玉へば喬國老
が曰く心易く思ひ玉へ我吳夫人に告て危き事なからしめ
ん玄徳拜謝して回り玉へハ喬國老宮中に入て吳夫人に見

へ玄徳人の害せん事を畏ると云けれバ吳夫人大いに怒り
我婿を誰か肯て害せんとする急ぎ此書院に呼寄日を擇ん
で婚禮を成しめんとて即時に玄徳を招きけれバ玄徳宮中
に入て告て曰く若趙雲外に在てハ内外の事通せずして從
へ來れる五百の軍士安りに散て狼籍せん願くバ共に此處
へ移らしめ玉へ吳夫人之に過たる易き事やあるとて乃ち
ことごとく府中に移し置けれバ玄徳少し心を安んじなが
ら恐懼の内に數日を送り玉ひけるに此日吉日ありと云沙
汰して大いに酒宴を設け玄徳を後堂に招いて孫夫人と配
偶の禮あり夜に入て酒宴止けれバ玄徳房に入玉ふに兩傍
に燈火を運ねて鎗鎗刀をロシと集め相從ふ諸々の侍女皆
劍を帯て出けれバ玄徳曾打騒いで魂ひも身に付ず色を失
つて恐れ玉ふ時に房中の事を惣司せる年長たる女あり之
を管家婆と号す玄徳の恐れ玉ふを見てゆるハ貴人心を
安んじ玉へ孫夫人幼きより武藝を好む常に侍女を築め
て劍を使ふ事を樂とす此故に此の如し玄徳の曰く是夫

人の行ふ事にわらず我甚だ心を塞す暫く武具を收めいへ
管家此由を告げれば孫夫人大いに笑ひ多く戰場を經た
る人猶武具を恐る。かき云てことごとく取收めければ玄
徳房に入て枕席を共にし詞を巧よして誘き玉へ孫夫人
深く喜ぶ玄徳金巾を與へて左右の侍女の心を結び先孫乾
を荆州に回し傳簡を以て孔明に此由を報じ連日酒宴して
相親み玉ひしかば吳夫人喜んで愛敬せ

○錦囊の計事趙雲王を救ふ

吳主孫權ハ吳夫人が怒り又因て了に玄徳を實の婿とし兼
ての計事ことごとく相違しければ榮桑郡へ人を遣し書簡
を以て此趣きを周瑜に報じ別よ計事を求めける周瑜ハ
命未だ痊す病を養つて居たりしが之を聞て大いに驚き
茫然として呆れ果如何せん心苦しめ又一ツの計事を案
ト出し密書を封じて孫權に献つる孫權開き看るよ
周瑜百拜頓首書を主君明公の坐下に上つる昨嘗て大事
を謀るが爲に反覆此の如き事を想へる既に已に假を弄

争ハせして自から御方に屬すべし今若玄徳を荆州に回さ
バ後大いなる害をなさん早く周瑜が計事に従ひ玉へと勤
めければ孫權甚だ喜び急ぎ東府の宮室をしつらひ多く花
木を植諸々の器物其奇麗を極めて玄徳孫夫人を移し入し
め女樂數十人を増て精羅錦綉金玉珍寶を山の如くに集め
ければ吳夫人ハ此由を聞孫權實の心を以て我婿を愛敬す
るとて其喜ぶ事限りなし案の如く周瑜が謀事に違はず玄
徳ハ色に溺れ聲に迷ふて荆州の事を打忘れ孔明が戒めし
言をも思ひ出さず晝夜遊樂して居玉ひけり此時趙雲ハ五
百人の兵者と東府の前に居たりけるが終日無事にして徒
然に堪かね城外に出て馬を奔しめ弓を射たりなんどして
日を過し今年も已に暮に逼りければ屹と心付て思ひける
隙ハ孔明三ツの囊を再び授け第一ハ南徐に行て早く開け
第二ハ年の終に及んで開き看よ第三ハ事甚だ危くして進
退路なき所よて開き看よ内に神變不思議の計事あらんと
云玉へり今年も終に及べり第二の囊を開き看んとて密か

して眞と成す必ら老凶を以て吉を爲べし劉備英雄の姿
を以て關羽張飛簡雍の將あり更に諸葛を兼て謀を用
ふ必ず久しく屈して人の下に在る者非ず愚大計を謂ふ
に備を吳中ハ軟困して爲よ盛に宮室を築て以て其心志
を喪し其美色玩好を多くして以て其耳目を娛ましめ關
張が情を分關し諸葛が契を隔遠し各一方に置しめ然し
て後兵を以て之を攻ば大事定るべし今若之を縱して人
をして俱よ驕場に在しめば恐く蛟龍雲雨を得て終に
池中の物に非ず願くば明公熱之を思へ書言を盡さず
幸いに照察を乘玉へ

孫權看了りて大いに喜び張昭と議しければ張昭が曰く此
計事よく某が心に合へり劉玄德幼きより貧賤の家にて育
ち四海ハ流浪して一日も富貴榮耀を身に受せ今若大度高
堂を築いて美女を聚め金銀衣服の奇麗を盡さば彼必ら老
心溺れて荆州に回る事をも忘るべし然る時ハ萬疎遠まし
て孔明も關羽張飛も深く怨を含んで散亂せん然らば荆州

又開き看て計事を心よ領し宮中よ入て玄徳よ見へん事を
求めければ侍女此由を玄徳よ報す玄徳呼入て何事ぞと問
玉へば趙雲大いに驚きたる体をなしてすしけるハ君ハ深
宮の内よ樂みをなして荆州よ回る事を思ひ玉ひぬか玄徳
の曰く如何なる事か出来て以ての外に驚きたる趙雲が曰
く今孔明早船を飛せて曹操赤壁の恨みを雪ん爲よ精兵五
拾萬騎よて荆州へ攻來る君を守護して片時も早く回りに來
れよ注進よ玄徳の曰く然らば孫夫人と之を護せん趙雲が
曰く若夫人に知せ玉ハ君必ら走回玉ふ事叶ふまじ今
夜密かに船を飛して回るべし遅き時ハ荆州破れん玄徳の
曰く汝暫く待我別よ子細あり趙雲再三に及んで退きけれ
ば玄徳内よ入て孫夫人よ對面し涙を含んで哀み玉へば孫
夫人問て曰く丈夫何ゆゑに哀み玉ふぞ玄徳の曰く我思ふ
に一身他國に飄泊して生てハ父母よ事する事能はず死てハ祭
祀を致し事能ハ老是大道無道なり今年も已に暮て歳旦も
近きよあり之に因て吾心甚だ悼む孫夫人笑つて曰く我已

に聞知れり趙雲が荆州の危きを告たりしゆる故郷は回らん事を思ひ玉ふか玄徳驚いて宜ひけるハ夫人已に知玉ハ我何ぞ詐らん今昔回らざる時ハ荆州必らず破れん然る時ハ是天下の笑ひを引ん今又回らんとすれば夫人に別れん事を要ふ此故に哀むなり孫夫人が曰く我已君の妻とある君の行玉ハ所我必らず従へん玄徳の曰く夫人の心ハさも有べけれども呉夫人孫權許し玉ハト只我を憐れと思ひ玉へ一度此を別てハ何くの妙場ハ討死せんも知がたければ再會又期なかるべし夫人若真女の志を守りて再び他人ハ嫁し玉ハ老んば我九泉の下に於て其恩の深きを知ん孫夫人が曰く君如何なれば活る不吉の言を出し玉ふぞ玄徳の曰く夫人問玉ハ老や世の跡に公子登壇不醉則飽壯士臨陣不死即傷といへり敵に趣くの人ハ命を失ハん事料りがたし是に因て預じめやすかりとて涙を流し玉へ孫夫人が曰く必らず心を苦め玉ふ我よく母に告て共に荆州に回るべし玄徳の曰く仮令呉夫人ハ

許し玉ふとも孫權又従ふまト孫夫人が曰く我に一ツの計事あり君よく従ひ玉ハんや玄徳の曰く願くハ聞ん孫夫人が曰く元日の拜賀に夫婦江邊に行て先祖を祭ると母に告密かに出て荆州に歸るべし玄徳の曰く若然る時ハ我何をか憂ひん必らず外に漏るべからずとて密かに趙雲を呼よせ元日の朝賀に香江の畔りに出て先祖を祭ると号し夫と共に走るべし汝ハ路に出て相待べしと云玉へ趙雲が曰く君よく舊日の事を思ひて孔明の計事に違へ玉ふなとて退きける已に今年も暮て建安十五年春正月朔日にありぬれハ國中皆新年の慶びを賀して呉主孫權文武の大將を堂上に集め酒宴を設けて壽を祝す玄徳ハ孫夫人と宮中に入て呉夫人を拜し玉へ孫夫人母に告て曰く玄徳常に父母を慕ひ先祖の墓ごとく涿郡に在を以て日夜に感傷せずといふ事也今日又年の元おれハ江の畔に出て北を望んで祭りを成んとす此故に母に告やすかり呉夫人が曰く之誠に孝行れ道あり汝曾て夫の父母を識すとハヤし

がら共に行て祭をさるべ是又喪たるの道あらん孫夫人拜謝して玄徳と共に直ち江邊に出けるに之を知もの更になし孫夫人ハ車にのり玄徳ハ馬に乗數十騎を引て城外に出玉へ兼てより趙雲五百の勢を率して待受南徐を離れて態と陸路より逃たりける此日の酒宴に呉主孫權大いに酔ければ扶けて後堂に入しめ文武の諸將ごとく退出し始めて玄徳ハ今朝夫人を伴て逃たりといふ妙法を聞奪に及んで孫權に告んとすれば孫權前後も知を酔臥たり漸々五更の頃に至つて少し酔さゆければ左右の人急に右の由を告たりけるに孫權驚いて側て明き夜未だ明するに諸の大將を集め如何せん上議しければ張昭が曰く今日玄徳を捕へざる時ハ彼必らず大いある害をなさん早々に追かけ玉へ孫權之に従ひ陳武潘璋二人に精兵五百餘騎を授けて急ぎ二人を捕へ来れと下知しければ二人命を受けて馳出孫權ハ心の内深く玄徳を恨み怒つて案の上ある玉石の硯を握へず微塵に握り碎きければ程督が曰く君空一

冲天の怒を成玉へども某恐くハ陳武潘璋が分としてハ玄徳を捕へ来る事叶ふまト孫權が曰く如何なる故ぞ焉んぞ我命に背かん程督が曰く孫夫人ハ幼きより武藝を好み玉ハ御志の剛なる事尋常の人の及ぶ處に有す此に因て諸の大將皆怖る今又玄徳と共に出玉ハ陳武潘璋焉んぞ手を下す事を得ん孫權いよく怒り自ら帶たる劍を取て孫權同二人に授け汝二人此劍を以て早く追蒐先我妹の首を斬て次に玄徳が首を取来れ命に背かハ罪に行ハんと云ければ二人千餘騎を引て飛が如くに馳向ふ

○孔明二度周瑜を氣死す

去程に玄徳ハ馬に鞭ち車を早めて夜中に路を急ぎ漸く柴桑の界に近付玉ふ所に機より馬廻りを立て騎馬の勢五六百騎が程督が如くに追来る玄徳驚いて如何せん云玉へ趙雲が曰く君先前ハ落延させ玉へ某跡に獲つて一軍せんと云ける所に又向ふの山より二手の勢打て出大音わけて玄徳早く馬より下て繩に掛れと呼ハリ一文字に路を

驚る是元來周瑜が計事にて玄徳を取逃さん事を畏れ餘て孫權に告て諸州の舟手に番を付て制符をらされバ一艘も船を出さず又陸路より逃ん事を畏れて徐盛丁奉二人に三千餘騎を付要害を陣をとり山の頂上斥候を置て玄徳若陸路より走らバ必らず此路を通らんと申けるゆゑ徐盛丁奉忘らず用心する處も忽ち斥候の兵馳來り只今大勢の道を早めて通るの必らず玄徳にていへんと申す二人大い笑ひされバこそ周瑜の計事に出す想ちも生捕んとて馬に飛乗兵を引て道を塞ぐ玄徳色を失ひ前後敵ありて進退已ま谷れり如何すべしと問玉へバ趙雲が曰く君少しも思ひ玉ふも孔明軍師先に三條の妙計を授け玉已に二つを開き見るに其宜きに合はずといふ事なし第三の錦囊の事危きも臨んで進退路なき所に開き見よと云玉へり今之を觀るべしとて開いて玄徳も献つれバ玄徳是を見て急ぎ車の前へ行て大い哭き孫夫人に宣ひけるの我心も思ふ事あり恥へバ夫人に告ん孫夫人問て曰く如何ある事ぞ早々に

孫玉へ玄徳の曰く呉侯孫權元より周瑜と計事を合せ夫人を餌として吾を釣よせ荆州を取んと巧玉へり吾若亡びあバ夫人何くにか飯する事を得んや吾實死を恐れずして來りし者の夫人元より男子の胸襟ある事を知て必らず能く我を怜み玉のんと思ふ故なり今孫權密かよ吾を殺さんとす是故荆州事ありと詐りて早く出て走る者の實に夫人に別れん事を哀み共よ國に回りに素よりの志を遂ん爲なり今又孫權跡より追かけ周瑜又行先を塞いで討止んとす夫人よわらずんを如何して此禍ひを逃れん若許容し玉はずんバ吾今車の前に自害して志を顯さん云玉へバ孫夫人怒つて曰く我兄已に我を賣の妹とせず我何の面目あつて再び國に回らんや今日の危きハ我自ら救ふべしとて急に車を推せて進み出陣を授け徐盛丁奉を散々に斬り汝等何ぞ無難なる謀反せんとの必かと云けれバ二人周章馬より下武具を地に棄て申けるハ某等争でか謀反を企つべき周瑜の命に因て玄徳を生取ん爲なり孫夫人大

いよ怒つて曰く周瑜賊匹夫反逆を企てんとするか何とて國の恩を忘れたる玄徳ハ大漢の皇叔として今日我夫たり我母も見へて許しを受共荆州に回らんとす是私よ走るにわらず汝等二人山際を勢を揃へて此路を塞んとするハ吾夫婦を擒にして財寶を奪はんとの巧なるかと聲を揚げて斬りけれバ徐盛丁奉頭を地に附て曰く願くバ夫人怒りを休玉へ素より某等が知事わらず周瑜の下知を受けて已事を得ずして此の如し孫夫人いよ叱つて曰く汝等ハ偏に周瑜を怕れて何とて我を怕れざる周瑜若汝等を殺さバ我豈周瑜を殺さざるべけんや早々回りに此山を申せ吾今夫婦荆州に回る汝等が知事わらず我兄孫權も常よ甚だ我を怕る何ぞ況んや周瑜匹夫をや急ぎ車を早めよと下知して飛が如くに通りけれバ徐盛丁奉再び馬に打乗り我等ハ臣下の身なり争でか夫人を生取んや殊に趙雲が眼ざし偏に撫切にせんとするの氣色なり去來や回らんと云て五六里計りも來りけれバ陳武潘璋二人兵を驅て飛が



如くに馳來り徐盛丁奉右の趣きと審に語りければ陳武
潘璋が曰く何故に取逃し玉へ我等二人の呉侯の命を受
て追來れり早く追つめて生取んとて四人兵を一手合せ
鞭を加へて追かくる玄徳の已に難を逃れ車に傍て馳玉ふ
所に又後に喊の聲して大軍間近く追來る玄徳怖れ驚き孫
夫人に向つて曰く追手の勢馳來れり如何して逃るべき孫
夫人申ける「君早く兵を引て落玉へ我趙雲と追手を防ん
玄徳即ち五百の兵を引て江に傍て馳玉ひしかば趙雲馬を
躍らせ車を留めて追手を待追手の勢已に近付ければ四人
の大將遙く孫夫人を見て皆馬より飛下又手して立孫夫人
問て曰く汝等此に來るの如何なる故ぞ陳武潘璋答へて曰
く「某二人呉侯の命を受夫人と玄徳とを謂て回らん爲な
り孫夫人大いに怒つて曰く汝等逆賊良もすれば我骨肉の
間を阻て妨ぐ我已に玄徳と事へて今日國に回らんとす是
私に走るもわらず母の命を受て夫婦共々荆州にさる誰
か能阻て留めん仮令呉侯孫權自ら出來り玉ふとも宜しく

禮を將て對面あるべきは汝等四人妄りに兵權を放ち、よ
し無禮をなして主従の法を亂る必らず謀反を巧むならん
と罵りければ陳武潘璋等ことごとく地に跪いて心の内に
思ひける「夫人は是呉侯と骨肉の兄弟よしして母の許を受
て荆州に赴き玉ふ況んや呉侯の大孝行の人あり仮令其心
よ如何思ひ玉ふとも母の命をわらんに背き玉ふ事有べ
からず君等輕々しく生取て萬一呉夫人の怒よ遇ば如何し
て身を全ふせん況んや玄徳の此中に見へず又趙雲が目を
怒したる氣色怖しければ四人の大將互ひ互ひ面を見合て徐
々々と引退く孫夫人車を推せて通りければ四人の大將兵を
收めて之より榮桑も程近ければ先馳行て周瑜に此由を告
んと議して猶豫せる所に忽ち一手の軍馬其勢ひ恰も旋風
の如く馬を飛せて馳來れり諸人を見れば乃ち蔣欽周泰
二人あり馬上より問て曰く如何に玄徳が行方を知玉はず
や四人の大將答へて曰く今朝已に此所を逃去れり今ハ遙
く落延ぬらん蔣欽驚いて曰く諸大將何ゆゑに生取玉ふぞ

る四人の大將答へて曰く孫夫人母の許を受たりと宜へり
此故に生取ことを得る蔣欽が曰く呉侯已に此の如くから
ん事を料り某二人に御劍を賜はり先妹を斬て次に玄徳
を殺せと命ト玉ふ四人の大將驚いて曰く已に速く落延た
り如何して追付ことを得ん蔣欽が曰く玄徳が勢ハ大半歩
武者あり吾等馬を飛せて即時に追付べし徐盛丁奉二人ハ
早く榮桑へ回りに周瑜に此事を告快船を馳て向より廻り
玉へ我等四人ハ馬を早めて後より追かけんと云ければ徐
盛丁奉ハ榮桑を回り蔣欽周泰陳武潘璋の大軍を引て飛が
如くに追かけたなり玄徳の夫人と共に路を急ぎ已に榮桑を
打過て劉郎浦といふ處に上岸に傍て渡を求め玉ふに渺々
たる江水大波天を拍て舟一艘も看へざりしかば如何すべ
きと仰天し玉ふ趙雲續いて馳來り君虎口の危きを逃れて
此處まで來り玉へり某量る孔明軍師必らず宜しき計
事あらん少しも憂ひ玉ふを慰めしかども玄徳默然とし
て心の内に呉に在し時の繁華を思ひ覺へず涙を流して趙

雲先に進んで渡りの船を尋ねよと云玉ふ所より後より馬烟
を立て追手の勢來れりと陳武玄徳山に上りて望み玉へば
騎馬の大勢飛が如くに出來る玄徳大いに哭き此間の疲れ
によつて人馬共々物の用に立がたし追手の大勢又來れり
如何せんとして身を揉玉ふ所に早喊の聲耳根に響きければ
諸軍皆逃散んとするに忽ち江の内より二十餘艘の快船帆
を引て岸に近付たり趙雲が曰く之こそ天の助あれ早く此
船に乗せ玉へとて皆我先にに乗ければ忽ち頭上給巾を戴
き身も道服を被たる人舟底より這出手を拍て大いに笑ひ
皆々心を安んじ玉へ某此よりわけて久しく相待と云けれ
ば玄徳之を見玉ふに乃ち諸葛孔明あり其外荆州の船手の
勢商人も身を出立馳しく船底より出たりしかば玄徳再
び生たる心地して已に船を推出せば時を逃さき追手の勢
岸より臨み其船回せと聲々に呼びける孔明冷笑つて岸上の
人を指さして曰く我已に計事を定めて國に回る汝等速か
よ去て周瑜に此由を申せ再び萬人を以て人を釣の計事を

行ふ事亦かれど同音は咄と笑ひければ岸の上より雨の降ゆく箭を放つと雖も已に順風帆を揚たれば舟の快き事飛が如し呉の大將とすべき様なく岸に傍て馬を早むる所に忽ち大波逆捲わがりて賊の聲響きければ孔明之を見よ同じ追手に帆を揚たる兵船數百艘中央に帥の字の旗を建て周瑜自から眞先に進み左は黄蓋右に韓當其勢ひ飛鳥の如く速かき事流星に似たり様は追かけしかば孔明御方を下知して盡く岸より登り船を棄て陸路より走る周瑜も是を見て速かに岸に上り馬に打のりて追かければ黄蓋韓當徐盛丁奉飛が如く馬を早め諸々の軍勢の過半歩立よて相續く周瑜馬上にて問て曰く此所如何ある所ぞ軍士答へて曰く前即ち黄州の界なり周瑜いよく馬を早めて已に追付んとする所に忽然として賊の聲天地を碎き一彪の軍馬山の陰より討て出眞先に進むる玄德の弟關羽なり周瑜大いに驚いて急に退んとすれば關羽八拾二斤の青龍刀を舞して勢ひに乘て斬てかゝる周瑜手足を張

て恐れ慄き散々に走る所に又左より黄忠右より魏延二手の勢討て出勢ひに乗て四角八方へ放散しければ呉の勢殘り少きに討れ周瑜も身に矢を射立ふれて這々船に取乗ければ孔明味方の勢を下知してことごとく大音わけ周郎妙計高天下二陪丁夫人一又折兵と呼はらせ一同に笑ひければ周瑜之を見て心怒り安からぬ事かな再び船を岸に着陸に上りて一軍せんと云ければ黄蓋韓當推留め次第々々に隔りければ周瑜諸將に向つて曰く我今何の面目ありて再び呉侯に見へんやとて一聲大いに叫びけるが金瘡ことごとく破れて船の上に倒れ血を吐て絶えければ諸將扶け起して榮榮まで回りけり孔明の呉の勢の迷回るを見て玄德を守護し荆州へ回り諸軍に恩賞を施して慶ぶこと限りあし蔣欽周泰等の周瑜を救ふて榮榮まで回り南徐に來りて吳主孫權に右の事をも告げれば孫權大いに怒り程普を大將軍として國中の勢をことごとく起して荆州を攻んと議しける處に周瑜又計簡を献つり早く兵を起して此

恨を雪ぎ玉へと勸む張昭之を聞て深く諫め今曹操常に赤壁の耻を雪んとて兵を集むとすせむ君又玄德と力を合して共に之を防ぎ玉の事を畏れて未だ輕々しく密來らず今若一旦の怒り因て玄德と戦ひをせし玉の、曹操必ら走虚に乗て攻來らん君如何して防ぎ玉ふべきと云ければ孫權が曰く然る時如何すべき顧雍が曰く此國の内必ら曹操が細作あらん若君の玄德と不和あるを聞ば曹操必ず玄德と好を結はん玄德又呉を怕れて必ず曹操に従ふべし然る時再國甚だ危ふし如し使を以て都表を上せ玄德を荆州の大守に封じて曹操は知しむる時曹操必らず攻來る事なく玄德之を聞ば喜んで再國を恨る事なかるべし只然るべき人を擇んで都に上せ間諜の計事を用て玄德と曹操と常に不和あるの方便をささしめ緩々と計事を用ひて後必らず荆州を奪ふべし孫權が曰く汝が計事我心に合へり誰人を用ふべき顧雍が曰く平原高堂の人に華歆字の子魚といふ者の元より曹操が爲に愛せらる此人を用

ひ玉へ孫權大いに喜び華歆を召て密かに間諜の計事を命じければ華歆即時に打起て直ちに都へぞ上りける
○曹操大いに銅雀臺に宴す
赤壁の合戦に曹操が百萬の勢残りなく討れければ僅に命を逃れて都に回り常に此恨を雪んと思へども軍勢未だ整はず又ハ玄德孫權力を併せて防ん事を恐れ時を待て居たりけるが建安十五年の春銅雀臺の造營事了りければ文武の大將を鄴城に集め酒宴を設けて慶びをなす抑も此宴とすすの往日袁紹を滅して後銅雀臺を地中より掘出し漳河の邊に高き臺を建て之を銅雀臺と号し左に玉龍臺を建右に金鳳臺を建皆高き十餘丈にして空中に反橋を掛て往來を通じ千門萬戸金碧日に耀き直欄欄欄珠玉日に映す此日曹操七寶の金冠を戴き緑錦の袍を被て腰に玉帶をかけ足に珠履を踏で高臺に上りければ文武の大將ことごとく臺下に侍立す曹操先諸將の弓を試んとて赤地の錦の袍を高き楊の枝にかけ交ひ百歩を隔て二行に諸大將を備へ曹

氏の一族の皆紅ひの袍を着し外様の諸將の皆緑の袍を着す。盡く馬に騎て雁弓よ長き箭を取揃へ一齊に備りければ曹操下知を傳へて曰く若揚に掛たる袍の赤も胸背を射たる者あらば金を鳴し敵を打て聲を合せ乃ち其袍を恩賞とすべし若射損じたる者に水を飲せて罰すべしよく射る者へ之を射よ射る事能はざる者へ罰盃を飲ど其旨未だ了らざるに紅ひの袍を被たる中より一人弓を取て馬を出す諸人之を見れば乃ち曹操が姪に曹休字の文烈あり往來馬を飛せて走る事三遭にしてよく扱て丁と射る其矢直中に當りければ堂上堂下射りりと感じて金鼓を鳴す曹操も大いに喜んで之我家千里の駒ありと云ければ近侍の人楊に掛たる錦を取て曹休に與へんとするに忽ち縁の袍を被たる中より一將馬を馳出し之の丞相の錦あり一族の中より取玉ふ事かかれ某よ渡し玉へと呼はりて馬を飛して馳廻る諸人之を見れば乃ち荆州の大將に文聘字の仲業あり一矢見んと望みければ文聘馬を蒐すへ兵と

射る其矢直中より當りければ金鼓を鳴して感稱す文聘大音わけ快よく揚よ掛たる錦を渡し玉へと呼はりければ又紅ひの袍を被たる中より一人馬を飛して蒐出少將軍已に射當玉へり汝奪へんといふ何事ぞ我手なみの程を見よやと云て引つめてハッとして射る諸人聲を揃へて感稱し誰ぞと見れば曹操が從弟の曹洪あり走り寄て楊に掛る錦を奪へんとすれば又縁の袍を被たる中より一人の大將馬を出し汝三人心當り射中たりと雖も何ぞ奇妙とするに足んや我手柄の程を見よやと呼はる諸人之を見れば河間の張郃なり馬を飛して往來し後さまよ成て射りければ其矢過たき心當にわたりて四度放つに一ツも逃れざりしかば張郃大音わけ誰か我に及ぶ者あらん錦を渡し玉へと呼はる所又紅ひの袍を被たる中より一人馬を馳出し御邊後さまよ四筋の矢と射中たりと雖も誰ぞか我よ及ぶべきと呼はる諸人之を見れば夏侯淵なり馬を飛して往來し殺よく成ける時首を回して後さまよ射る其矢過たす向に張郃が射た

る四筋の矢の真中に立ければ馬を躍らせ大音わけ如何に錦の主の我にわらせやと云ける時諸人感稱して金鼓を鳴しければ又縁の袍を被たる中より一將喚いて馬を出し御邊錦を取ることかかれ留めて我よ還せと呼はる諸人之を見れば大將徐晃なり鳴を静めて看居たれば徐晃大音聲わけ汝等心當に射中たればとて安んぞ錦を取ん我よく錦を取て看よやと云て引つめて丁と放つ其矢遙かに柳の條を射切て錦の袍地に落ければ走り寄て背に打かけ馬を飛して馳廻り臺上を望んで丞相の賜を謝し奉つると呼はりければ諸人皆驚く處に忽ち臺の下より一人馬を躍らせ聲をわけ汝錦を取て何くへか行早々に我に與へよと叫ぶ諸人之を見れば誰郡の許褚なり直ちに馬を飛して錦を奪へんとすれば徐晃奪へれじと逃廻り相近く成ければ弓を以て散々許褚を打つ許褚左の手に其弓を握り右の手より徐晃を掴んで已よ引落さんとしければ徐晃弓を棄て馬より飛下て逃んとするよ許褚も續いて馬より下り二人引

組て錦を扱合散々に打擲す曹操臺の上より之を望み人を出して兩方へ引退けしむる時彼錦の已に微塵にありけり曹操二人を臺上へ呼上せけるに徐晃の目を怒らして拳を握り許褚の牙を咬眉を盛めて共に争へんとする氣色に見へければ曹操大いに笑ひ我今日汝等が徳を言んと欲す何ぞ錦の袍を惜まんやと云て文武の大將をことごとく臺上へ招き上せ蜀江の錦一匹を分與へ位階に依て列坐し水陸の珍味を連ねて音樂天に響き酒宴數刻に及びければ曹操やけるハ武將の已に弓馬を以て能を顯せり文官の者どもハ皆博學の名士あるに此臺上に登りて何ぞ佳章を賦して一時の勝事を記せざると云ければ諸の文官坐を起て之を謝し願くハ釣命に従へんと云て互ひに相譲りける時一人進み出て曰く某不才に以へども願くハ銅雀臺の時を獻つらん曹操之を見れば乃ち諫議大夫蔡司空軍事東海郡の人に王朗字の景興あり雲箋を拂つて七言を綴る

銅雀臺高壯二帝畿一 水明山秀鏡光輝一

三千劍佩趨黃道 百萬貔貅現紫微
風動綺羅一金鳳舞 雲生碧瓦玉龍飛
君臣慶會休辭醉 携得天香滿袖皈
曹操大いに喜び玉爵を以て酒を賜ひ乃ち其玉爵を思
賞に與へければ王朗拜謝して退く處又一人進み出て曰
く老臣も願くば但語を献つらん曹操之を看れば東武亭侯
侍中尙書左僕射潁州長社の人に鍾繇字ハ元常とて善書
の妙を得たる者なり乃ち七言八句を書して曰く
銅雀臺高接上天 凝眸覽過舊山川
欄干屈曲留明月 窓戶玲瓏壓紫烟
漢祖歌風空擊筑 定王戲馬漫加鞭
主人盛德齊堯舜 願樂昇平萬々年
曹操之を看て限なく喜び御邊の佳作我を過譽する事太だ
しと云て重く恩賞を與へ又諸大將に申けるハ我本愚庸に
して才淺ければ始め孝廉に舉られ微名を世に立る時ハ望
み足りと思ひしに後に天下の大亂に逢て病を發らん爲に

故郷に回り譙東の五十里に精舍を築き夏秋ハ書を讀み春
冬ハ獵をなし二十年の計事をなして身の難を逃れ天下の
治るを待て又仕官せんと思ひしに丁に某が意に任させ
朝廷徵て熙軍校尉とあし玉ふ是故に専ら國家の爲に游賊
を誅し功名を世に傳へて死して後にも墓を封じて漢の故
征西將軍曹侯の墓と呼べば先祖をも辱しめず平生の願
ひも是までならんと思ひしに又董卓が難に遭て義兵を舉
げ黃巾の亂を平けて一萬餘人の首を斬後に袁術を討て其
四人の大將を擒にし袁紹を破りて其二人の子を誅し劉表
を定めて荊州を推さ位已に宰相に登りたれば人臣の富貴
自ら極まり意の願ひ已に過たり天下若我あくんば國々
に謀反して帝と稱する者豈數ふるに暇あらんや或ハ人わ
り我權重く位高きを看て天下を慕の心ありといふ是は亂
の道あり齊の桓公晋の文公よく後代に名を傳る者ハ其身
勢ハ大にして猶周室に事るゆるさる孔子の曰く周文王
三分天下一有其二以服事殷一之徳其可謂三徳也

己矣夫能大いあるを以て小なるに事ふる此を歌々在
心といふ又樂毅が傳を讀に昔日樂毅趙に叛る趙王兵を起
して共に燕を伐んとす樂毅地に拜伏し涙を流して申ける
ハ臣昔日燕王に事る猶大王に事るが如し軍死すとも不義
の事をせと云り又蒙恬が傳を讀に胡亥昔日蒙恬を殺ん
どす蒙恬が曰く我父祖及び子孫に至るまで徳を泰に積事
三世あり吾今手下に精兵三十萬を築めたり之を以て謀反
せば胡亥我を如何とかし玉ハ然れども必死して義を
全ふる者ハ敢て父祖の教を辱しめず又先君の恩を忘れ
ざるなりと云り我此二人の書を讀で感嘆して涙を流さず
といふ事なし我父祖を無逆の心あらんや今日の言ハ皆是
肝膽を吐の誠なり右懸に詔る仔細ハ昔周公金縢の書を
讀して自ら明らめ人の信せざらん事を恐れ玉ふ我今集る
所の兵を棄て我封せられたる武平侯の國に回らんと願へ
ども若手下の兵を棄へ人に害せられん事を畏る故に又子
孫の爲を計り萬一人に害せられば漢の天下も随つて滅び

なん是故に已事を得ずして兵を司せざる汝等文武の諸將
必ず我此心を知まると云ければ諸將皆拜伏し伊尹周公と
雖も丞相の徳及及びハトとぞ申しける曹操數盃を傾け
覺へず大いに酔ければ右左ハ命トて筆硯を取よせ我も自
ら銅雀臺の賦を作んとて雲箋を推延吾獨二歩於高臺二分俯
觀三萬里之山河といふ二句を書ける所ハ忽ち人あり呉の
孫權今華歆と云者を使とし天子ハ表を上りて玄徳を荆州
の太守とし妹孫夫人を以て妻へせ荆州九郡大半已ハ玄徳
ハ屬せりと告げれば曹操手脚を張て大いに驚き覺へず筆
を落したりしかば程昱が曰く丞相敵軍の中に在て矢に中
り石ハ打れ玉ふ時も嘗て心を動し玉ハ今玄徳が荆州を
得たるを聞て何故ハ斯以ての外に驚き玉ふぞ曹操が曰く
玄徳ハ人中の龍なり平生未だ水を得ず今荆州を得て龍の
大海に入たるが如し我何ぞ驚かざらん程昱が曰く丞相今
華歆が來りたる本意を知玉ふか曹操が曰く我其故を知ら
ず程昱が曰く呉の孫權元より玄徳を憎む若兵を起して之を

攻バ丞相の慮に乗て擊玉ハん事を畏る孫權今華歆を使として立徳を太守に封せんと奏するものハ一ツハ立徳が心を安んじ二ツハ丞相の望みを塞ん爲なり曹操が曰く然る時ハ如何なる計事かを問ふ程昱が曰く某ハ一ツの計事あり立徳と孫權とに合戦させて御方中より攻る時ハ二人を滅さん事一舉にあり曹操大いに喜び我南方を討んと思へども立徳孫權が力を合せて防がん事を怖る汝如何なる計事かある程昱が曰く呉の孫權が頼むもの周瑜なり丞相今天子の勅命なりとて周瑜を南郡の太守に封じ程昱を江夏の太守に封じ華歆を朝廷に留めて重く用ひ玉ひなハ周瑜程昱我封せられたる城を取んとて又立徳と荆州を争ひ必らず合戦に及ぶべし其時慮に乗て別に良計事をなさば忽ちに打滅さん曹操甚だ喜び此計事我心に合へりとて即時華歆を臺上へ呼上せ重く恩賞を與へて太理寺少卿に封じ詔を予して下して周瑜を總領南郡の太守に封じ程昱を江夏の太守に封じ勅命を傳へて呉の國へ使を

馳酒宴數刻に及んで諸大將を引具し皆許昌へぞ回りけり
 ○孔明三度周瑜を氣死す
 去程に勅使詔を傳へて呉より周瑜を南郡の太守に封じ程昱を江夏の太守に封じ玉ふと云ければ二人謀んで詔をうけ恩を謝して勅使を回しけるが周瑜心と思ひけるハ荆州ハ元我國たるべきを立徳奪ひ取れ今天子詔を下して我を南郡の太守に封じ玉ふと雖も一寸の地をも得事能はず早く荆州を取返して日頃の恨みを散せんとて其身の瘡を養つて柴桑に在ながら書簡を以て吳主孫權に此事を報ぞ孫權ハ南徐に在て其書簡を披き見急ぎ魯肅を呼んで曰く汝向ハ荆州を取返さんと云て立徳孔明に出拔れたり今立徳我妹の婿となりていよく荆州を返す事なし汝之を如何とかせん魯肅が曰く某向に立徳孔明と約を堅ふして証文を取來れり蜀の國を取て後に荆州を返さんと云り孫權大いに叱つて曰く若蜀を取て後に返さんと云ハ何れの年にか返すべき徒らに日月を送らバ我一生の中



に荆州を取ると能ハト魯肅が曰く某願くば再び荆州に渡り早く之を取返さんとて了し船に乗て出よけり此時立徳ハ荆州に在て夥しく兵糧を貯へ軍馬を調練して博く賢人を求め玉ひければ四方遠近之を聞て我もくと馳集る活る處に呉の國より魯肅來れりと告げれば立徳乃ち孔明に問て曰く今彼が來れるハ何故ぞ孔明が曰く孫權向ハ君を荆州の太守に薦む是曹操が隙を窺ハん事を畏れてなり曹操今周瑜を南郡の太守とす是又荆州を争はせて中よて計事を成ん爲なり魯肅が來れるハ周瑜已に南郡の太守に封せられて又荆州を奪ひ取んとするの意を起せり立徳の曰く然る時ハ我如何對ふべき孔明が曰く魯肅若荆州の事を申し出さバ君兎角の對を云す大いよ聲を放つて哭き玉へ君の悲んで深く哭き玉ふ時某自ら出て計事を成さん立徳乃ち出迎へ魯肅を堂上に請トて坐を譲り玉ひければ魯肅が曰く皇叔ハ吾國の婿されバ某が爲にも主君なり安んぞ坐に就べと立徳の曰く何故に謙退し玉ふ魯交を

思ふゆゑなり魯肅に側らに坐し茶禮了りてすけるハ某
今吳侯の命を受専ら荆州の事をすさん爲に來りたり已に
久しく借玉ひて今に至るまで還されず今日一家の好を結
びし事あれハ早々に快よく返し玉へ之徳聞も肯て面を掩
みて大いに哭き玉へハ魯肅驚いて問て曰く皇叔何事をか
哭き玉へ之徳禮を放つていよく悲み玉へ所は孔明屏風
の後より出て曰我先より能聞り魯肅我君の哭き玉へ仔細
を知玉へか魯肅が曰く某未だ知也孔明が曰く我願くハ
其子細を述ん我君向ハ荆州を借玉へ時蜀の國を取て後に
返さんと約せり然れども思ふハ蜀の劉璋ハ漢朝の骨肉我
君と兄弟の如し若兵を起して其國を奪ひ取ハ天下の人唾
を吐て罵るべし若又荆州を返し蜀の國をも取すんハ何れ
の所にか身を處ん若荆州を返さすんハ吳侯の怒り玉へん
事と思ふ是故に事二ツあがら難し此ハ依て涙を流して哭
き玉へと云けれハ之徳又胸を打て大いよ悲を聲を放つて
哭き玉へ魯肅坐を起て曰く皇叔さのみ哭き玉へぞ某孔

明と事を離せん孔明が曰く御身願くハ國に回りに吳侯に
見へ一言の勞を辭せ皇叔の痛み哭き玉へ由を語り玉へ
然る時ハ吳侯定めて怒り玉へ魯肅が曰く吳侯若從ハす
んば如何孔明が曰く吳侯已に妹を以て皇叔に妻ハせ玉へ
り安んぞ從ひ玉へざるの理あらんや願くハ御身よく此事
を料ひ玉へ魯肅ハ本より寬仁の長者あれハ之徳の痛く哭
き玉へを看て兎角の議論にも及ハず酒宴已で歸りけれハ
之徳孔明拜謝して送り玉へ魯肅ハ船を解て直ちに柴桑に
到り周瑜に逢て右の趣きを告けれハ周瑜大いに驚いて曰
く御邊又孔明に出拔れ玉へハ昔之徳が劉表に身を寄て在
し時常ハ國を奪ハんとするの志あり何が況んや蜀の劉璋
をや何ぞ漢室の宗親なると思ふて取す云の理あらんや
只何とぞして事を託了に荆州を返さじとするものなり若
荆州を返さすんハ御邊必らす君の怒りに還玉へん再一の
計事あり孔明を賺し得べし御邊再び荆州に行玉へ魯肅が
曰く願くハ計事を聞ん周瑜が曰く御邊又荆州に行て已

妹を以て婚とする上ハ是便ち一家の好あり若蜀の劉璋ハ
漢室の同宗あるを以て國を奪ふハ忍びずんハ我吳國の勢
を起し蜀を攻取て婿引出物に進らすハ其後必ず荆州を
返さるべしと云玉へ魯肅が曰く夫蜀の國ハ天下無双の難
所にして殊に遙々人の國を経て向ふ事なれば安んぞ容易
に攻取ことを得ん此計事無用ハあらずや周瑜冷笑つて曰
く御邊ハ眞に篤實の長者なり我安んぞ輕々しく蜀を攻取
事を得ん只蜀を取を名として實ハ荆州を取ん爲あり我蜀
を攻るといふて大軍荆州の道を通らハ之徳必らす出迎へ
て持成べし其時兵糧武器あんとを乞求め直ちに城下に推
よせ其備あきを攻ハ荆州を取ん事掌にあり然る時ハ我
平生の恨を雪ぎ御邊の難をも救ふべし魯肅大いに喜び拜
謝して又荆州に行けれハ之徳怪んで孔明に問玉へ孔明が
曰く之ハ魯肅未だ吳侯孫權に見へず只柴桑に回りに周瑜
と計事を定め今又此に來れる者あり君只某が點頭を見
て領承し玉へとて共に出迎へけれハ魯肅内に入て禮了り

某國に回りに皇叔の哭き玉へよしを語りけれハ主大孫
權甚だ盛徳を感じ諸大將と評議をなして兵を起し蜀を取
て皇叔に引出物せんと欲す若蜀の國を以て進せば早々に
荆州を返し玉へ我國の大軍此道を通らハ願くハ些の兵糧
武器を接應して遠路の疲れを勞ひ玉へ孔明急に點頭て申
けるハ古より非親不親其禍一と云り是誠ハ吳侯と
一家の好を結ぶ故あり之徳謝して宣ひけるハ是皆魯肅の
御恩あり詞を以て安んぞ謝する事を得ん孔明が曰く若吳
の國の軍蜀に向ハ必らす此地を通らん我自ら遠く出
て持成べし魯肅心の内密かに喜び別れて柴桑に回りけれ
ハ之徳乃ち孔明に問て曰く今蜀を取て我に與へんと云ハ
如何ある故ぞ孔明大いに笑つて曰く周瑜が死きハ近付た
り此等の計事を以て安んぞ健兒を名欺き得ん之徳の曰
く其故を聞ん孔明が曰く是古の假途滅虜の計事あり
周瑜今蜀を攻るを名として實ハ荆州を取ん爲なり君若
城を出て吳の軍勢を持成玉ハハ勢ひに乗て生取奉つり備

なきを攻て不意に荊州を取んとす玄德の曰く然る時の如
何せん孔明が曰く御心を安んト玉へ我必ら老奴三拾箇司一
以擒猛虎安三排香餌一以釣三鯨魚一周瑜若此に來らバ假令
死せずとも九分の魂ひを失ふべしとて趙雲を呼で密かに
計事を授け自ら備へをあして相待ければ玄德深く喜び玉
ふ魯肅の舟を飛せて柴桑に回り周瑜に見へて玄德孔明大
いに喜び呉の國の軍勢荊州を通らバ必らず自ら出て持成
んとやしむと語りければ周瑜手を打て笑ひ此度又孔明を
欺き得たり御邊の南徐に行て此趣きを呉侯に訴へ諸方の
城に用心の勢を籠て又程普を大將として大軍を備へ我を
助け後陣とし玉へと云ければ魯肅別れて出にけり此時周
瑜が失策大半平癒して已に白旗を掲げ膿水も止りて一身
無事ありしかバ甘寧を先手とし自ら徐盛丁奉を引て船手
より向ひ心の内仕濟したりと歡び笑ひ樂んで已に夏口ま
で來り此邊に迎に出る人やあると尋ねさせければ忽ち
劉皇叔より糜竺といふ者使たりと報ず周瑜呼入て對面

しければ糜竺が曰く主人已に金銀兵糧を用意して諸軍勢
の勞を慰めんが爲に續いて此所へ運び來り周瑜が曰く
皇叔の今何くに居玉ふを糜竺が曰く已に荊州の城を出
足下の來り玉ふを待て酒を進んと欲す周瑜が曰く今我國
の大軍を起すハ皇叔の爲に蜀を取て進らせん爲あり諸軍
皆遠路に疲る必す重く持成て輕々しくし玉ふ事かかれ糜
竺別れて回りければ周瑜陸に登りて兵船を江上に臨へ諸
軍次第を守りて已に公安まで來り其邊を窺ひせけるに一
艘の舟も見へせ又出て迎る人もあかりければ徐々と進ん
で早荊州の城まで十里餘りに成ぬとて遙かに向を看渡
すに靜々として人獨も看へず先手に進んだる斥候の兵馳
回り荊州の城を看ひへバ白旗二流立て人わりども看へせ
いとやす周瑜心怪しむ岸の邊に船を留めて甘寧徐盛丁奉
等を從へ精兵千餘騎にて直ちに荊州の城下に到りけるに
出合人もあかりしか巴周瑜馬を留め兵に命じて門を開け
と呼ひらせければ内より問て曰く此に來るハ何者ぞ呉の

兵奮へて曰く之ハ呉の國の大都督周瑜あり其詞未だ了ら
ざるに一聲の梆子を鳴して城の上なる白旗を推倒し紅ひ
の旗を二流指わけ鎗を鞘へ戈を双べて大將趙雲高檣にあ
がり大音にて問て曰く周瑜督如何ある故ありて來り玉へ
る周瑜答へて曰く我皇叔の爲に蜀を取て進せんと約せり
此故に此に來れり御邊怪んで問ハ何故ぞ趙雲が曰く孔明
軍師已に御邊の假途滅虜の計事を推量して我を此
城に留め置玉へり我君ハ是漢室の宗親安んを義に背いて
蜀の國を取ん御邊端のもし蜀の國を取バ吾髮をさばきて
山中に身を藏し天下に信を失ふまじ周瑜之を聞て計事の
顯れたるに驚き急に馬を引回さんとすれば一人令の字の
旗を指たる者馳來り今巡警の勢をして窺しむるに關羽ハ
江陵より攻來り張飛と稱歸より攻來り黃忠ハ公安より攻
來り魏延ハ房陵の小路より攻來り四方の軍馬其多少ハ知
せ賊の聲遠近に響きて四方百餘里を震動し皆周瑜を生取
にせよと呼ひりと告げれば周瑜之を聞て馬上にて大い

に叫び金鎗ごとく破れて馬より倒まに落血を吐て絶
入しかバ諸將急に救ふて船中に回り儘かに人心地付ける
所に忽ち一人走り來り玄德孔明前ある山の頂に在て酒を
飲樂みをあすと告げれば周瑜いよく怒りて牙を咬齒を
切り己等我を輕んじて蜀の國を取て能ふまじと云我
必らず縛つて取べしとて拳を握りて恨る所に吳主孫權弟
孫瑜を大將として助けの勢を指したり周瑜呼入て對面し
右の事共を語りければ孫瑜やけるハ我兄の命を受此に來
りて御邊の力を助けんとす此儘にてハ叶ふまじ暫く引退
き玉へとて先手の勢を下知して已に巴丘まで來りけるに
斥候の士卒向ふに大勢の見ゆるハ敵の勢にあらずやと呼
ひる孫瑜よく是を聞バ荊州の大將關平劉封二人江上
を切塞いだりとし周瑜いよく怒りをあし牙を咬て恨
る所ハ孔明使を以て書簡を送るとやす周瑜封を開いて之
を見るに其書に曰く
漢の軍師中郎將諸葛亮書を大都督公瑾先生の麾下下致

す亮柴桑の別より今に至りて懇々として忘れず聞足
下西川を取んと欲すと亮以爲必らき不可あらん益州
民強く地險にして劉璋が暗弱あるも以て自ら守るに足
り今節を擧て遠く征せんと欲す轉運萬里全功を收んと
欲す吳起と雖も其規を定る事能はず孫武も其後を善す
る事能はず操君を無するの心有ど雖も而も主に奉ずる
の名有或の愚人あり操が利を赤壁に失ふを見て復遠伐
の志を興す事あしとす今操天下を三分して其二を有
つ馬を涪海に飲ひ兵を吳會に觀んと欲す魯んで肯て坐
がら中原を守りて王の師を老さんや今孫將軍兵を興し
て遠征するの長計に非ず倘操が兵一たび至らば江南
粉とやらん坐ら視に忍びず特に此に告知す幸ひに照鑒
を垂よ

周瑜看了りて恨氣宵に塞り長嘆一聲急に左右の人を呼で
紙筆を求め手づから遺書を封トて吳主孫權に獻つらしめ
諸大將を集めて曰く我忠を盡して國に報せる事を思はざ

るよ有す如何せん天命已盡り諸將よく力を盡して君
事（共に大業を成玉）と云了り昏絶して目を蓋ぎける
が忽ち又苦げ息を繼天を仰いで長嘆「天已周瑜を此
世に生ト玉何故に又孔明を生じ玉へると云て聲を放つ
て大いよ叫び忽然として命終れり壽き三十六歳時に建安
十五年冬十二月初三日あり諸將哀み哭き柩を巴丘に留め
て周瑜が遺書を早馬打て吳主孫權に獻りければ孫權此由
を聞て涙を流して地に倒れけるを魯肅扶け起し遺書を開
き見れば即ち魯肅を大都督として周瑜が職に代らしめよ
とあり其書に曰く

瑜緒に伏して泣血頓首百拜書を主君明公の麾下下致す
切に凡才を以て昔討逆殊特の遇を受け委するに腹心を
以てす遂に榮任を荷ふて兵馬を統御し志鞭撻を執て
自ら戎行を效す先に巴蜀を定め次に襄陽を取る威靈に
憑頼事掌握にあり不韙を以て忽ち暴疾あるに至る昨自
醫療するに日々加へ益なく人生死あり修短命あり誠に

情に足る但恨らく微志未だ展ず復使命を奉せざるの
み方に今曹操北に在て疆場未だ靜からず劉備が許寓虎
を養ふに似る事あり天下の事尙未だ終始を知らず此朝士
肝げて食ふの秋至尊慮を垂るの日あり魯肅忠烈事に臨
んで苟くもせせ以て瑜が任に代べし人の將に死んとす
る其首善し倘或の言の探べきあらば瑜死して朽す楮に
臨んで痛切の至りよ勝す

建安十五年冬十二月初日上書

孫權見了りて大いよ哭き周瑜王佐の才あり今不幸にして
亡びたり吾今より如何せん終に臨んで魯肅を薦む我豈從
いざらんやとて即時魯肅を大都督として國中の兵權を
総領せしめ周瑜が柩を巴丘より送り來りければ孫權自ら
半途に出て之を迎へ涙を流して悲しみ哭く

○孔明大いに周瑜を哭く

此時孔明の未だ周瑜が巴丘にて死たる事を知りけるが
夜天文を見るに將星巴に地に落ければ乃ち大いに笑ひ周

瑜今死たりとて次の日玄徳に見へて其事を語る玄徳人を
出して聞しめ玉へ周瑜果して死たりとす玄徳の曰く
今周瑜死せり却つて如何計事をささん孔明が曰く周瑜が
職に代りて吳の大都督とある者へ必らず魯肅にていん
某夜天文を見る將星多く東方に聚る某今周瑜が喪を
吊ふと尋して吳の國に至り賢人を尋ねて伴ひ來り君の助
と致すべし玄徳の曰く先生若し吳に行は彼國の大將必らず
書をさすべし孔明が曰く周瑜が在し時にも某猶怖る、
事あし今日又何をか怖れんとて趙雲を伴ひ五百餘騎を引
て祭の具を整へ船に乗て出けるが途にて聞は吳主孫權已
に魯肅を大都督とし周瑜が柩を送りて柴桑まで回りぬと
す此に仍て直ちに柴桑に到りければ番の兵急き魯肅に
報じ劉皇叔孔明を使として周都督の喪を吊ふと云けれ
ば魯肅迎へ入て對面す周瑜が手下の大將之を聞て皆孔明
を殺して日頃の恨を雪んとしければも趙雲が劍を帯て立
るを見て敢て輕々しく手を下さず孔明盤前に祭りを設

け自ら酒を備へて地に跪き祭文を讀んで曰く

維大漢の建安十五年南陽の諸葛亮臨んで濟灼庶羞の儀を以て祭を大都督公瑾周府君の靈前に致せ曰く嗚呼公瑾不幸にして夭亡と修短故に天人傷まざるに非ず我君寔に愛して酒一觴を酌ふ君其靈あらば我蒸嘗を享よ君が幼學を吊へば以て伯符に交り義に仗て財を練んト舍を讓りて以て居君が弱冠を吊へば風雲に濟會し霸業を定建して江甯に割據す君が壯力を吊へば遠く巴丘を鎮め景升慮を懷き討虜憂さし君が手度を吊へば佳小喬に配す漢相の婿當朝に愧せ君が氣概を吊へば主質を納す始め翅を垂す終によく翼を奮ふ君が都陽を吊へば蔣幹來り説く府君舌を納れ主に事へて終に濟ふ君が弘才を吊へば文武籌略運々たる小子心塞く騰落つ昭君漢々公獨諤々火攻敵を破り強を挽いて弱とあす君が當年を想ふに雄姿英發君が早く逝を哭いて地に俯して血を流す忠義の心英靈の氣命三紀を終て名百世に垂る君を哀ん

で情切あり悲傷千結惟我肝膽悲んで斷絶する事あり吳天昏暗三軍愴然主已に哀泣更に皆涙漣たり亮不才計を求む吳を助けて曹を拒み漢を輔けて劉を安んず犄角の援け首尾相備ふ若くは存じ若くは亡ぶ何をか慮り何をか憂ふ嗚呼公瑾生死永く別る朴にして其貞を守り冥々滅々魂如し靈あらば以て我心を鑑みよ此より天下再び知音あり嗚呼痛し以哉孔明祭り了りて大いに哭き地に伏して涙泉の如く哀慟して已ざりしかば吳の國の將士も共に哀を催し人皆周瑾をのり哭き親む事骨肉の如くと低語けり魯肅も孔明が痛く哭くを見て心の内に哀れを催し孔明更に周瑜を害するの心おかりしに周瑜が氣量窄くして自ら死亡を取たりと思ひければ謹んで敬ひけり孔明別れて岸の邊に出已に船に乘んとしける所に一人道服を被て竹の冠を戴さる者臂をのべて孔明を引搦を聲を厲して曰く汝已に周郎に氣を

病せて亡し却つて喪を吊ふと号して此に來り吳の國の人を明かに欺いて土にて作れる人形の如くと争でか我を欺くべきとて劍を抜て殺さんとす魯肅後より來り無禮とるあと呼りり難ぞと告げ乃ち襄陽の龐統字の士元遺書あり風雛先生あり魯肅推止め孔明今禮を以て此に來れり必らき書する事おかれと云ければ龐統解を棄て打笑ひ是處れあり怪み玉ふあど云けるゆゑ魯肅別れて回りけり龐統獨孔明を送りて船中に来り共に心中の事を物語するに孔明やけるの我量るに吳主孫權必らず御邊を用ひ玉ひ若此に在て心に驚ざる事あらば荆州に來りて共に玄德を助け玉へ玄德の寬仁の君あり御邊來らば必らず日頃の志を遂ん我書簡を對じて留り置べし御邊之を以て荆州に行我假令居合すとも玄德必らず用ひ玉ふべしとて相別れ其より孔明の四郡の巡見に出たり吳主孫權の蕪湖といふ處まで出て周瑾が柩を迎へ自ら祭をさして悲み哭き周瑾の子共三人ありて一人の女あり周瑾二男周胤共に父の柩



を送りて故郷に厚く葬りければ孫權の南徐に回り將將と
周瑜才を稱して日夜涙を流し今已に吾股肱を失へり安
んぞ又大業を起さんと哭きければ魯肅が曰く某の碌々
として道に足ざる庸才あるに周瑜が薦に依て大都督の任
を受とせせむ甚だ以て其職に稱はず願くば一人を薦め
て君を助けしめん此人は上天文に通じ下地理を曉り謀略
の管仲樂毅に劣らず孫權の孫子呉子に並ぶべし周瑜曾て
其言を用ひ孔明も深く其言に服と幸ひに今此處にあり君
何ぞ重く用ひ玉のざる孫權大いに喜んで曰く願くば其名
を聞ん魯肅が曰く此人は嘉陽の世家龐統字の士元建寧を
鳳雛先生とす者あり孫權が曰く我も久しく其名を聞り
今何くにか在早々に呼來れ魯肅乃ち龐統を伴ひ來りて内
に入て禮を施す孫權其人を見るに面黒く鼻墊げ眉厚くし
て鬚短かく形容古怪にして男つゝ思かりければ心の内事
はず乃ち御邊の學女處如何ある事かあると問ければ龐統
答へて曰く必らず一物に拘らず機に臨んで變に應じし孫

權又問て曰く御邊の才智周瑜に比せば如何龐統が曰く
某が學女處の周瑜と大いに相違せり孫權常に周瑜を愛
して及女者わらじと思ひけるに龐統今之を輕んじければ
心の内怒を含んで御邊先退け重ねて用ふる時節あるべし
と云ければ龐統長嘆して外に出けり魯肅問て曰く君何ぞ
龐統を用ひ玉のざる孫權が曰く是狂人あり用ひて何の益
かわらん魯肅が曰く赤壁にて曹操を打破りし時此人連環
の計事を以て第一の功を立たり君よく之を忘ひ玉へ孫權
が曰く之何ぞ龐統が功あらん曹操手下の兵の大派に洵る
、事を憂へて本より船を縛合せんとする意あるに因て
あり我曹つて此人を用ゆまじ魯肅如何に勸むれども孫權
丁に用ひざりければ力あく外に出龐統を呼て我御邊を薦
むと雖も如何せん呉侯更に人を用ゆる事能はず暫く忍ん
で時節を待玉へと云ければ龐統長嘆して首を低ても云
せ魯肅問て曰く御邊此國を去んと思ふ必ありや龐統答へ
せ魯肅又曰く御邊匡濟の才を懷き何ぞ功名の成ざるを憂

んや若此所に留り玉の、恐くば徒らに埋れ玉ふべし意に
思ふ事わらば明かば語り玉へ龐統が曰く我都に行て曹操
に事へんと欲す魯肅が曰く若曹操に事へ玉ふ時ハ明珠を
暗きに投ざるが如し速かに荆州へ行て劉玄徳に事へ玉へ
必らず重く用ふべし龐統笑つて曰く我元より此意あり曹
操に事へんと云ハ詐りて處る、あり魯肅が曰く我書簡を
以て御邊を玄徳に薦むべし御邊若荆州に事へ玉ハ常に
よく吾國と好みを結び萬睦ましくして共に曹操を破る時
ハ是兩家の幸ひあり相構へて此事を忘れ玉ふな龐統が曰
く是我平生の願ひありとて乃ち書簡を求め直ちに荆州へ
と赴きける

○來陽縣に張飛龐統を薦む

此時荆州にハ孔明自ら四郡の巡檢に出で玄徳城を守りて
坐しける所に忽ち江南の名士龐統といふ人特に來つて用
ひられん事を求むと報じければ玄徳曾て其名を聞玉ひし
ゆゑ急に呼入て對面し玉ふ龐統内に入て長揖して拜せざ

りければ玄徳其貌の陋く男つゝ惡さを看て心の内に喜び
玉のす御邊遠く此に來る如何なる故ぞと問玉へハ龐統態
と孔明魯肅が書簡を出さず答へて申けるハ某久しく魯
叔の賢人を求め玉ふと承りて此故に此に來れり玄徳の
曰く今荆州已に定りて官人の缺たるものあければ御邊を
用ゆべき職なし此より東北に當つて百三十里を隔て來陽
縣といふ處あり今此處に縣令あり御邊暫く行て治め玉へ
後に缺たる官わらば必らず重く用ふべし龐統心の内に玄
徳我を甚だ輕んず今孔明も此處に在合さねば才智を以て
驚かず可と思ひ領承して直よ來陽縣に到り日夜只酒を飲
で樂みをなしたに縣中の政事をも治め民の訴へをも聽
ず日を歴て事の滞りのみ出來ると雖も更之之を決斷せん
ともせず人民ことごとく恨を抱きければ此由隠れなく荆
州へ聞へけり玄徳大いに怒り憎ら廢れ儒者何ぞ吾法度を
亂るやと云て遂よ張飛を呼齊汝孫乾と來陽縣に行て巡檢
し若不法なる事わらば緊しく正し來れと云玉へハ張飛

承へり孫乾と數十騎を引て來陽縣へぞ赴きける縣中の
吏民此由を聞てことごとく出て迎へければも龐統の獨出
ず張飛吏民に問て曰く縣令の何とて迎へ出ぬぞ答へて曰
く縣令龐統此所に来り玉ひて後已は百日にあまりいへど
も曾て政事を治めず只明暮酒を飲で民の訴へをも聽玉の
す今日も宿酒未だ醒す此故よ出る事を得ず張飛之を聞て
大いに怒り走り入て縛らんとしければ孫乾諫めて曰く龐
統の高明の士なり輕々しくすべからず只縣中に入て明か
に尋ね若罪あらば正し玉へ張飛實も同して廳上に坐し
縣令に逢んと云ければ龐統衣冠をも整へ必醉を扶けてよ
ろめさ出たり張飛怒つて曰く我兄汝を以て人物として此
所の縣令たらしむるに汝如何なれば法度を亂る龐統冷笑
つて曰く御邊我を責て法度を亂るといふ如何なる故ぞ
張飛曰く汝此處に來りて已に百日も餘ると雖も民の訴
をも聞て縣中の政事をも治めざる何故ぞ龐統曰く我
最るに百里許りの小縣僅かなる所へありとも何ぞ決斷す

る難き事あらん暫く其の御待し我此間の訴を片時の
内は決斷すべしとて即時に下吏を呼よせ百日餘りの公務
を聞て一々に斷り定め諸々の訴狀眞偽曲直紛々として結
の亂れたるが如くなるを分明に裁斷して分毫も錯りなく
百日餘りの事を半日が内に決しければ吏民皆地に拜して
其明かなるを喜ぶ龐統乃ち張飛に向つて曰く此百里の小
縣を治るに何程の事かいはん曾操孫權をも我肩ともせ
ず張飛大いに驚き席を下りて拜謝し先生の大才我安んぞ
よく知ん我回らば必らず先生を驚むべしと云ければ龐統
乃ち魯肅が薦る所の書簡を出す張飛曰く先生向に我兄
に見へ玉ふ時何とて此書を出し玉はざる龐統曰く出た
りとも信なりとし玉ふまじきを恐れてなり張飛乃ち孫乾
に向つて曰く若御邊の諫めにあらずんば必らず活る賢人
を失はんぞと相別れて荊州に回し張飛に見へて右の事を
語るに玄德大いに驚き我眼明かならせして大賢人を失ハ
んとせり急ぎ呼回すべしと云玉へ張飛乃ち魯肅が薦る

書簡を出す玄德封を開いて看玉ふに其書に曰く
龐士元の百里の才に非ず治中別駕の任に處しめれば始め
て當に其驥足を展べきのみ如貌を以て之を取は恐くば
學女處より負かん亦終に他人の所用とならん實に惜むべ
き哉 建安十五年十二月 東吳魯肅拜書
玄德之を見ていよく後悔し玉ふ所を忽ち孔明四郡を巡
りて回りに來れり報を玄德呼入て對面し玉へ孔明先問
て曰く龐統先生の意なきか玄德の曰く近頃來陽縣を治め
させられたれば大いに法度を亂らしゆえ今其罪を正さんと欲
す孔明笑つて曰く龐統の百里の小縣を治る才にわらず胸
中の謀略某に勝る事十倍せり某向に呉の國へ行し時
書簡を對して龐統に渡し之を以て荊州に行は我假令在す
とも必らず重く用ひ玉ふべしと云て相別れ其より四郡を
巡檢仕つりしゆえ只今此より回りに來れり某が薦る書簡
を見玉はきや玄德の曰く今日却つて魯肅が薦る書簡を得
たり先生の書は未だ達せず孔明曰く治る大賢人を少し

さある事を用ゆる時ハ事に退屈して只酒を飲て放逸なる
べし玄德の曰く若張飛が薦りにあらずんば必らず大賢人を
失ふべしとて乃ち張飛を來陽縣に遣し敬んで龐統を迎へ
させ玄德自ら無禮の罪を謝し玉へ龐統乃ち孔明が薦る
書簡を出す玄德開き見玉ふ風塵若至らば宜しく重く用ひ
玉ふべしとありければ玄德始めて魯肅司馬魯肅徐庶が詞
に伏龍鳳雛二人の内を若一人を得て天下ハ忽ち安からん
と云り今我二人共に得たり漢の天下再び興るべしとて其
喜ぶ事限りなく願て龐統を副軍師中郎將に封じ孔明と共
に軍馬の事を總司せりて陣法を練成せしめ玉ふ時に建安
十六年夏六月あり曉の細作此由を聞都へ早馬を打て玄德
今孔明龐統を用いて軍師とし軍馬を集め兵糧を貯ふ必ら
ず呉の孫權と計事を合せて近き内に都へ攻上るべし御用
心あるべしと告たりければ曹操大いに驚き諸大將を集め
て計事を問ふ時よ奇飲進み出て曰く必ず都の勢を動すべ
からる西涼州へ使を馳て太守馬騰を召上せ其兵を並せて

共に南方を征伐し玉の、天下の諸侯ごとく御方馬
して玄徳孫權を討ち滅ぶべし曹操之に従ひ即時に使を西
涼州へ下して馬騰が勢を催促す此馬騰の守り番成身長八
尺面黒雄異天性温良漢の伏波將軍馬援が後胤なり父馬
援の相傳の御時官を退いて漢西に沈没し若の女を娶りて
此馬騰を産り度々の功名朝廷に忠あるを以て靈帝の御時
に征西將軍に封せらる常に鎮西將軍韓遂と兄弟の如く交
り數十萬の兵を集めて其威北方を震けたり此時勅使昭
を傳へて急ぎ都に上るべしと催促しければ子馬超と留
めて國を守らせ次の子馬休馬騰兄弟の子馬岱と伴ふて一
老少残らざる引具し直ちに都に上りて先曹操に對面し次の
日漢の天子に見えければ曹操乃ち馬騰を偏將軍に封じ馬
休を車都尉に封じ馬騰馬岱を騎都尉に封じ關西の勢を
引いて日を擧いで軍を出し南方を征伐せよと下知しけれ
ば馬騰思を謝して退き吉日を擇んで荊州に打向ひ玄徳を生
取にせんとて用意する所に獻帝密かに馬騰を内裏に召れ

麒麟閣に登りて共に古の功臣を論じ玉ひ左右の人を屏け
て近く馬騰が前に寄ていかに汝が先祖を知たるかと問せ
玉へば馬騰答へて曰く臣が先祖の伏波將軍馬援にて功
名青史に遺りて深く聖朝の大恩を蒙れり帝宣ひ汝よく
先祖の忠烈に效ふて漢室を輔ひ扶け逆臣を誅伐せよ馬騰
が曰く臣已に勅命を受早く荊州に向つて逆賊玄徳を誅す
べし帝の宣ひく玄徳は是漢室の宗親あり安んず逆臣たら
ん逆臣の曹操あり近き内に必らず朕が位を奪ふべし降す
處の勅命皆朕が意に非ず汝よく先祖を思ふて朕が爲に之
を圖れ馬騰涙を合んで曰く臣昔衣帯の密詔を受嗣君重承
と曹操を伐んと討る所に不幸にして事敗れたり其後も此
心あきりに有ねども力及らざる故に黙止し帝宜へく朕常
に曹操を畏れて一日も一年を過すが如し今汝に大軍を司
せらしむ此時を失ふ事なく能く討事を運して漏す事なか
れ馬騰涙んで領承し臣願くば三旗を捨て國に報せんと云
て退出しければ帝頓首しく思召忍の内大いに喜び玉ふ馬

騰の家に入りて三人の子共をよび密かに右の趣を語りて
偏に曹操を討ん事を料る所に忽ち曹操使ひを以て南方征
伐の事延引あるべからせと催促し門下侍郎黃奎を行軍
謀として伴ひ行べしと下知しければ馬騰乃ち黃奎を召て
荊州に向ふ討事を議論し酒宴を設けて持成ければ半間に
及んで黃奎俄かに牙を咬で長嘆し我父實宛の昔幸催郭
祀が亂に逢て國の爲に命を捨てたり我常に命を切りて逆臣
を誅せんと思ふ所に不幸にして今又逆臣の命を從ふ我眞
に忍び難しと下しければ馬騰問て曰く御意今誰をか逆臣
と云玉ふと黃奎が曰く君を欺き上を犯し正しきを以て却
つて邪とする者の曹操あり馬騰心の内に是れ定めて曹操
が我を探ん爲に斯云するあらんと思ひ急に止りて曰く輕
々しく事を云玉ふ外に漏さば御身の大事を成ん黃奎叱
つてやけるの汝漢の名將の子孫にして今却つて逆臣に
膝を屈めて劉皇叔を討んとす何の面目ありて天下の人に
見ゆへ馬騰其ありてやけるのさて御邊信實の心にて

宣ふか黃奎指を咬で血を流し怒をなして申けるの我何ぞ
昨らん正しく天の照臨にあり馬騰之に依て帝の勅命を語
りければ黃奎が曰く我假命令を會るども其宜きを待たり
信る上り君の爲に三旗を脱みず偏に國に報せしめて二
人よく討事を合せ密文を馳て關西の兵を召のせ曹
操に勅命を著せんと云て彼が見物の場にて討殺すべしと
て討事已に定りければ黃奎別れて家に回り顔色も常さら
ず恨氣未だ散らさして偏に曹操を伐んとする氣色も看へ
ければ其妻淫んで再三問をも黃奎更に語らば其頃黃奎が
妻に李春香といへる女あり會て黃奎が妻の弟苗澤と私か
に通じければ苗澤何とぞして己れが妻にせん事を思ひ日
頃討事を運らすと雖も今に其志を遂す此時李春香密か
に苗澤に語りて黃奎の今日軍の陣圖に出玉ひしが回り玉
ひて怒りの氣更に已す難をか恨み玉ふやらんと云ければ
苗澤が曰く汝試みに詞を以て探り人曹玄徳の仁者にて曹
操の奸雄ありとす杯と云て黃奎が答へを聞け必らず其

實を露ハすべし案の如く黃奎其夜李春香が房に入れば
李春香詞を以て之を探るに黃奎醉に乘じて申けるハ汝ハ
婦人されども何體を知る如何に死んや我體代漢朝の職を
食ふとや我體の曹操を殺さん事を計る故あり李春香さ
ればこそと思ひ夜明て苗澤に告げれば苗澤究竟の事よと
真ひ急ぎ曹操に見へて明かに訴ふ去程に馬騰が檄文を看
て關西の兵勢しく上落しければ馬騰黃奎と相府に行曹
操に見へて勢難ひを仕つりいハん願くハ御見物あるべし
と云けるに曹操武士に命じて忽ちに二人を縛る馬騰問て
曰く我何の罪かある曹操曰く我汝を薦めて大將とする
所に却つて我を害せんとするハ何事ぞ馬騰黃奎再三服せ
さりければ曹操乃ち商議を出して証據とするに黃奎答ふ
ハさ詞さし馬騰大いに怒り黃奎の腐れ體者何ぞて情の大
事を漏しけるぞ我兩度まで逆臣を伐んとして不幸にして
事を成す是天運助けて漢室を棄玉ふり運命已に此
の如し嘆くとも何の益かわらんと呼りければ曹操下知

を傳へて二人の家を取圍と老小男女一人も残らず擒にし
市に出して首を切し馬騰が二人の子面を對して泣せら
れければ關西の軍士之を見るに忍びず皆涙を流して哀ひ
哉と叫ん曹操怒つて追散し二人の一族三百餘人をこと
く誅しけるに馬騰か姪の馬岱ハ如何して逃れたりけ
ん只一人本國へぞ逃下りける苗澤ハ曹操に見へて某外
に願ふ事さし此度の恩賞にハ李春香を求めて妻とせんと
望みければ曹操冷笑ひ汝一人の女に心を許て姉の一門を
ことごとく誅しけるが情る不義の人を生て置ハ天下の賢
之に過べからずと云て即時に首を割たりける
○馬超兵を起して潼關を取る
曹操ハ馬騰黃奎を誅して心の内喜ぶ處に早馬急を告て今
荆州の玄徳四方に勢を要服の如くに集め蜀の國を攻んと
企てハ早く征伐し玉ハせんハ由々しき大事あらんと報じ
ければ曹操大いに驚き玄徳若蜀の國を取ハ吾如何して戰
ふ事を得ん諸將の計事を聞んと云ければ一人進み出て曰

く某一ツの計事あり玄徳孫權に自滅を取せ呉蜀を吞の
計事をささん蕭操喜んで之を見るに乃ち治書侍御史參丞
相の軍事諸州許昌の人ハ陳羣字ハ長文とて陳寔が孫陳紀
が子ありければ汝如何ある妙計かわると問に陳羣曰く
今玄徳と孫權と好を結んで唇齒の助をさす玄徳若蜀を取
んとせば丞相大軍を起し合涪城に傾籠る勢を一手に並し
て直ちに呉の國ハ攻筑り玉ハ然る時ハ孫權必らず玄徳に
救を求むべし玄徳蜀を取の心ある時ハ必ぞ呉を救ふ事能
ハヒ若救ひのなき時ハ孫權力足らずして防々事能ハず呉の
國忽ちに破るべし若呉を破る時ハ一鼓に荆州を攻取後よ
り玄徳を襲ふて進退門あからしめん然る時ハ蜀も又御方
又屬せん曹操實もと喜び即時ハ大軍三十萬を起し合涪城
へ羽檄を飛せて大將張遼ハ此赴きを報じ先手に進んで呉
の國ハ向ハしむ呉の境を守る者此由を聞て急ぎ早馬打て
呉主孫權に報じければ孫權大いに驚き諸將を集めて計事
を議す時に張昭進み出て曰く魯肅元より玄徳と好みあり

殊に我國の婿かれハ魯肅に命じ併節を以て荆州に救ひを
求め玉ハ若玄徳と力を並せて防々時ハ曹操争でか輕々し
く攻来る事を得ん孫權怒るべしとて魯肅に命じて救を乞
せければ魯肅使を馳て荆州に到らしむ玄徳其書を開き看
て使者を客屋に留め置此時孔明ハ南郡に居たりけるを早
々に召寄せ魯肅が書簡を看せ玉ハ孔明看了りて曰く呉
の國の兵者をも動さず荆州の救ひをも用ひず曹操を呉の
國ハ向ふ事あからしめんとて即時に回節を調へ呉の國の
人々ハ只枕を高くして心安く思ひ玉ハ曹操若攻府の沙
汰あらハ我よく之を退くるの計事ありと對て呉の使を返
しければ玄徳問て曰く曹操今三十萬の大軍を起し合涪城
の勢を並せて南方へ攻下る其威恰も泰山の如し先生如何
ある計事ありて容易く退けんと云玉ハ孔明曰く曹操
が常に疑る、者ハ西凉州の勢あり今大守馬騰が一門こと
く曹操に殺され其子馬超本國に在て自ら大軍を司せ
る必らず深く曹操を恨むべし君書簡を以て馬超を語り玉

ハ馬超必らず兵を起して都へ攻上るべし然る時ハ曹操
軍でか呉に向ふの暇あらん玄徳限なく喜んで即時に孔明
に密簡を作らせ使者を仕立て西涼州へ下し玉ふ此時馬超
ハ西涼州にありて或夜の夢に深き雪の中に臥ければ多く
の虎走り來りて我を咬と看て打驚と心の内大いに疑ひを
おし夜わけて諸の大將を集めて麴合せを問ふ元來馬超
が旅本に八人の大將あり乃ち侯選程銀李堪張橫梁興成宜
馬玩楊秋あり八組の軍勢共に二十萬騎馬超が自ら領する
精兵六萬餘騎あり此日こどく來りて夢わひせををし
ければ一人身長八尺許りある男の眼目に裂け聲雷の如
くあるが一番に進み出たり諸人之を看るに馬超が帳前の
校尉八都の首將南安桓遠の人に龐徳字ハ分明といふ者あ
り乃ち馬超に向つて雪の中に虎よ遇ハ足不祥の兆あり父
君將軍都にて事あるにていひのきや甚だ以て心元なく
存じいといふ其詞未だ了らざるよ一人走り來りて地に拜
哭し叔父並びよ一門の老小こどく殺されたりと叫ぶ

諸人之を見れば馬岱あり馬超驚いて其故を問に馬岱答へ
て曰く叔父都に上り玉ひて侍中黃奎と許事を合せ曹操を
殺さんとし玉ひしが不幸にして事露ハれ兩家の一族盡
く市に斬れたり某一人幸き命を扶り墻を跳りて逃のび
乞丐人に拵れて關所を通り千辛萬苦を受けて是迄回りぬと
告ければ馬超大いに哭き昏絶して倒れけるを諸人扶け起
す處よ忽ち荆州の劉皇叔使を馳て書簡を送ると報を馬
超對を開いて之を看るに其書に曰く
備前首征西將軍の麾下に百拜す伏て念ふ漢室不幸に
して曹賊が權を専らにするに遭遇し魏無嗣殘廢臣をし
て政を乗り君を欺き上を罔し黨を結び羣を成しひる
事を致す天下の人其肉を食ハん事を欲せせと云事おし
令尊翁忠義四海に聞ふ今探に書せらる事を徴ひる此本
天地を共にし日月を同ふせざるの誓なり子たるの遺安
んぞ坐し視よ忍びん若龍西涼の兵を率ひて以て探が勢
に敵せば備前入荆襄の衆を率て以て探が威を遏む則ち

逆操擒にすべく森然滅ぶべく誓辱報すべく漢室興る
べし誠よ能世の如くハ幸ひ焉より大いなるハ其書言と
盡さず立て回報を待つ

建安十六年七月上旬日

馬超看たり候を推へて回報を關へ即時に西涼州の兵を催
して進發せんとする所に忽ち父の馬騰は日頃兄弟の如く
交りし欽西將軍韓遂といふ者使を以て馬超を招く馬超行
て對面しければ韓遂やけるハ是見玉へ只今曹賊が方より
書簡を送れり馬超乃ち披き見るに若馬超を生取て都に上
せば必ち老汝を對つて西涼侯にせんといひければ漢を流
して地を拜伏し將軍願くハ某を將りて都に送り于犬の
背みを免れ玉へといひけるを韓遂扶け起して曰く我御邊
の父と兄弟の交りをさす安んぞ捨る事とせん此故に御邊
を招いで此書簡を見せしむ若兵を起して父の誓を報する
必めらハ曹も力を盡して助くべし馬超拜謝して喜び先曹
操が使の書を解共到大軍を興して潼關に向つて攻かる

長安を守る大將鐘繇之を開て周章驚き早馬打て都へ急を
告げ自ら二萬餘騎を引て先長安の京兆府を離れ野外に出
て陣を張れば西涼州の先陣馬岱一萬五千の精兵を率し
野に南山に覆つて活々として攻來る鐘繇自ら馬を出して
進賊何ぞ規模を犯すと叫はりければ馬岱大いに怒り刀を
舞して討て戦り二人戰ひ一合をらざるに鐘繇怖れて逃た
りければ馬岱進ますと追かけ敵々を討破りて勢ひに乘て
鐘繇よりしかば鐘繇が二萬餘騎しころも成て知へたるを見
て馬超韓遂大軍を引て唯と意り其烈しき事曹の如くなれ
ハ鐘繇が勢弱り少なき滅びて長安城も燒燬る此長安城を
すすハ曹漢の高祖都を建玉ひし城郭なれば要害甚だ堅固
よして堅深く難除ければ馬超韓遂日夜攻れども更に解せ
已に十日餘りに及びければ龐徳密かに馬超よりけるハ此
長安城に昔より土積く水儲くして飲事能ハす又樂府に
事と欠く今已に十日餘り圍れて城中の人民こどく水
に渴し樂府を盡す如く曹ら圍を解て引退さケ操に

計事をなすに意を及ぼすべし馬超計事を聞て大いに喜
び即時に令の字の旗を差して下知を傳へ四方の許軍を解
て次第に退かしし次の日城の大將徐晃に上つて
望み見るに許軍の大勢をこく退きければ計事をあらん
事と恐れ敢て追々西の門より人を出して敵の旗をばし
ひるに果して遠く退きたりと申ければ少しも安んじ此
隙を水を得る魚と取らんとて城中の軍民我先にぞ出て追ひ
たり敵の又來らん事を畏れて往來断つて其人数を
も討へず此の如くある事已に三日よきければいよいよ
隙らぎ城門をこたく開いて心の儀又出入し五日を過
てハヤ敵こそ許たれど隙をばし軍民俄かよ周章ひしめ
ら城中又走り入る隙目ら攻口を断りて諸將を警しめ固く
守りて防ぎ取らば西の門をばし徐晃が弟の徐盛といふ者守り
けるに馬超直ちよ城の傍まで進ませ若早く門を開かざん
バ一人も残さず殺すべしと大言わけて呼はりければ徐盛
も矢倉の上より櫓々よ怒口す已に其夜の三更の頃城門の

上城より火物出ければ徐晃急ぎに打消んとすると思ひもよら
き一人の大將馬を飛して城出大言振て西涼の龐徳此に在
ると呼はり徐盛を一刀に切て断し千餘騎の精兵を引て四方
八面を警戒り門を打破つて許軍の勢を引入れれば馬超陣
邊大軍を驅て隙れ入即時に長安を襲取ければ徐晃の幸さ
命を助かり東の門より逃のび渡關を守て曹操に救ひを求
む曹操此早馬に驚いて先呉の關に向ふ事を聞き急ぎに曹洪
徐晃二人を呼ひ先渡關に行て徐晃を救へ若十日より内
に關所を破られれば必ず汝等が首を刎んよく力と
盡して十日の間城へよ大軍を續へて到るべしと云けれ
バ二人命を受命兵一萬餘騎を引て渡關に殺向す曹仁之を
聞て曹操を驚め曹洪年壯にして性甚だ剛しくいへハ恐
くハ事を仕損せし某處向つて丞相の來り玉までよ
く關所を守るべしといひければ曹操曰く汝ハ我に従つ
て兵糧を運送し大軍を關へよとて俄に軍馬をぞ驚へける
去程に曹洪徐晃一萬餘騎にて渡關に馳つて徐晃に代りて

要害を守り密しく固めて出ざりければ馬超毎日來りて關
ひを催し大言わけて櫓々に懸口せさせ罵り辱しめたりけ
れば曹洪城へかね新て出んとするを徐晃深く諫め今敵の
罵り辱しむるハ我等が討て出るを願ふ故あり必ず輕々し
く出玉ふ亦丞相來り玉ふを待て大軍一度に蒐らば奴原を
破らん事掌の中に在と云ところに馬超が軍勢替るし
來りて罵りければ曹洪の齒咬をして出んとするを徐晃大
いに諫めて引止むに八九日をも過ければ西涼の軍勢切
崖の邊まで近付皆馬より下て草の上に坐し多くの地に臥
て睡りかんとせし或ひハ罵り或ひハ笑ひ傍若無人の体とあ
しければ曹洪の氣早ある若武者矢倉の上より之を見て憎
き奴原が所爲かきと怒つて自ら三千騎を率し門を推開い
て驚地暗に討て出ければ徐晃も其失ちあらん事を恐れ兵
を引て跡に續く西涼の軍勢之に驚き馬を棄て戈を落して
散々に逃たりければ曹洪勝に乘て追躰る徐晃わとより大
言わげ早く回り玉へ長追い無用ありと呼ひる所に思ひも

許す後より喊を叫て作りて西涼の馬岱兵を引て斬て斃る
曹洪徐晃わつて驚き急に退いて關に入んとすれハ忽ち敵
の聲天地を碎いて山の後より左に馬超右に龐徳二手の勢
打て出路を横截て散々に取ひければ曹洪大いに亂れ大半
討れて漸々に關を出關内へ逃入んとするに西涼の大軍息
をも繼せ攻つてたりければ曹洪徐晃残り少きに討れ關
を棄て道々に逃走る龐徳直ちに渡關を乘取日夜を分たず
落行勢を追かけ、れば都より曹操が大軍已に半途まで出
先手の大將曹仁端なく路にて行合曹洪を救ふて時還るま
で攻戦ひしかば追手の勢備亂れて防ぐ事能はず又引返し
て走りければ曹仁兵を驅て追かけ渡關を取回さんと進む
處に馬超自ら大軍を引て討て出龐徳を救ふて散々に取ふ
曹仁曹洪人馬疲れて防ぐ事能はず又亂れ散て逃走れば馬
超兵を收めて渡關に陣を取曹仁の敗軍を引て曹操に見へ
曹洪徐晃取ひを仕損じて渡關已に破れぬと告ければ曹
操大いに怒り急ぎ曹洪を召てやけるハ汝向に十日より内

に關所を破られず必老首を刎んと云しを聞きや何故に
 今日を守る事能はず九日にして破れたる曹洪が曰く西
 涼州の軍勢餘りに我を辱しめ傲りなつて傍若無人の体
 りしゆも勢ひに乗じて討て出けれバ想ひざるに敵の計事に
 落されたり曹操が曰く曹洪の年壯き大將あり徐晃何ぞ之
 を誅めざる徐晃が曰く某頼りに就ひと申せども曹洪更
 に用ひ玉らず某が兵糧を照燭する原に軍門を開いて出
 玉ひしゆも其失ちあらん事を畏れて跡に續いて討て出た
 り曹操いよく怒り曹洪が首を刎て軍法を正さんと云け
 れバ諸の大將皆地に伏て命乞を暫らく罪を赦して後に
 功を以て補ひ玉へと望ししゆも曹操僅かに宥しけり

○馬超大いに渭水橋に戦ふ
 次の日曹操自ら兵を引いて潼關に推濟んとしければ曹仁申
 けるハ先陣屋を擧へて樂備を定め其後に攻掛り玉へ曹操
 之に従ひ人夫を分て三ヶ所に陣屋を造らせ自ら中央に在
 て左ハ曹仁右ハ夏侯惇あり西涼の大軍備を立て潼關より

出けれバ曹操も兵を引いて出向ひ敵の勢を望み見るに西涼
 の軍勢人強く馬壯んに一人長き鎗を掲げて駿馬に乗素さ
 袍に銀の甲を披て細腰寛袴ある大將一陣に馳出たり是
 乃ハ西涼の大將軍馬超字ハ孟起あり龐徳馬岱華やか細
 ふて其左右ハ從ハ八人の大將馬を双べて跡ハ備ハ稟々
 なる威風おたりを拂つて見へたりける曹操心の内大いに
 驚き自ら大音わけて汝ハ乃ち名將の子孫あるに何とて漢
 ふ曹いて謀逆をなすと叫りけれバ馬超牙を咬み目を怒ら
 して逆賊曹操汝君を欺き上を犯すの罪誅を容し難き所
 に射ハ我父と誓と是共ハ天を敵ざるの誓なり君必ら
 汝を生捉活ながら其肉を食ハん事と思ふなりと云て馬
 を飛し鎗を燃つて直ち曹操に突てかゝる曹操が後より
 大將于禁馬を出し戦ひ八九合入して叶はずして逃けれバ
 張郃入替つて戦ひ三合ならざるに是も叶ハで引退く三番
 入大將李通馬を出して五六合戦ひけるが馬超勇を奮つて
 李通を馬より突落し後の御方を一度招けバ西涼の大軍其



勢ひ雷電の如く而も振ず競ひ走る曹操大いに破れて散々
 に走りけれバ馬超百餘騎を引いて馬岱龐徳と中軍に蒐入曹
 操を生取にせんと尋ぬるに曹操亂れざる勢の中に在て逃
 たりけるが西涼の軍勢皆皆々ハ紅ひの袍を被たるが曹
 操なりと呼はるを聞て馬上にて急に袍を卸指て走りけ
 れば西涼の勢又聲々ハ鬚の長さが曹操なり餘すな泄すな
 と叫り呼りければ俄に劍を抜て其鬚をさり棄遣々ハ逃走る
 或人鬚を切たる由を馬超に告げれば馬超兵を下知して聲
 々に鬚の短さが曹操なり生取て鬚貫ハ預れと呼はらしむ
 曹操之を聞て魂ひも身ハ付ず旗を引裂て頸を包み馬を打
 て逃走る看苦しかりける形勢なり馬超ハ勝に乗て急に追
 かけ落行勢を四角八方へ打散し頸を包んだる大將一騎東
 を指て走る者ハ必ず曹操ならんと看ければ君の仇を亡
 し父の敵を討こと今日にありと喜び交ひ近くなりける時
 曹操逃る事なかれ馬より下て快よく首を渡せと呼りけ
 れバ曹操驚いて馬の鞍を地に落し跡をも見せして逃ける

に馬超已に追付曹操が林の中を通る時鎗を取のべ後より
突に突外して鎗の鋒を樹の中へ突洞し抜んとする間に
曹操已に逃のびたり馬超牙を咬で大いに怒り跡を巻ふて
追けれバ山の傍より年壯き大將一騎跳り出馬超快よく駐
れ曹洪此にありと呼はり刀を輪して蒐りしかバ馬超も曹
操を打すて曹洪と火を散して四五合戦ひ曹洪已に疲れ
て逃んとする時夏侯淵十騎餘りを引て救ひけれバ馬超御
方の續かざるを見て遂に引回す曹洪夏侯淵の手負
を助け本陣より回りて曹操に見へけれバ曹操嬉しげに打見
て我幾度か戰場に臨めども今日の如く烈しきを見ず已ま
馬超が手に掛るべかりしを曹洪に助けられたり今先日
の罪を免すいよく忠を致せといふて重く恩賞を施し敗
軍を收めて陣屋を守り要害に逆茂木を引て一人も出合す
時に建安十六年秋八月下旬あり西涼の軍勢毎日來つて戦
ひを催し様々に悪口しけれども曹操固く守りて出合す安
りに動くものハ首を斬んと云けれバ諸大將皆曰く西涼の

勢ハ甚だ力強くして能長き鎗を使ふ若弓を以て射バ御方
又勝事あらん中々力を以てハ争ひ難し曹操が曰く戦ふと
戦ハざるとの皆我一人の心にあり敵の心に在にあらざ西
涼の勢能長き鎗を使ふども此所へ入來つて強ちに諸將を
突事ハいまじ只我下知を背かず固く守つて外に出る事あ
かれ目から鎗の畏れもあるまじきぞと云けれバ諸大將
退き出て曹操が意を曉らす共み冷笑つて丞相いくらの
戦ひに遇玉へども遂に畏る、色を露し玉のす今馬超と一
戦に打敗て何とて斯ハ弱り玉ふぞと私語ける次の日斥候
の兵馳回り潼關にハ馬超又生手の勢二萬餘騎を添たり皆
北方の羌の兵よて屈強の者共なりと告けれバ曹操之を聞
て大いに笑ふ諸大將問て曰く敵ハ新手の大勢加はりたる
を聞て何故に笑ひ玉ふぞ曹操が曰く我敵を破るを見よ今
詞を以て述がたし三日過て又生手の勢馬超が陣に加はり
たりと告けれバ曹操酒宴をあして慶をのふ諸大將皆密か
に笑ひけれバ曹操が曰く諸將皆我に馬超を破る計事あさ

を笑ふか願くバ諸將の長計を開ん徐晃進を以て曰く今御
方の大軍此所を守りて敵も大勢にて潼關に屯急に勝負
を決し難し此より渭水の河の西にハ敵定めて用心あらじ
若一手の勢を忍んで蒲阪津といふ所より渡し密に敵の後
に出て先飯る路を塞ぎ丞相ハ渭水の河北より大軍にて攻
か、り玉ハ、敵前後を顧みる事能ハすして自から亂るべ
し曹操が曰く此計事大いによし今汝四千餘騎を率して大
將朱靈と直ちに河の西を襲ふて谷の内に埋伏し我河の北
へ渡るを待て一度に前後を攻よと下知しけれバ徐晃朱靈
密かに渭水を渡つて河より西に埋伏を去程に馬超ハ毎日
戦ひを催せども曹操軍に出ざりけれバ韓遂と計事を評議
するに忽ち一人走り來り只今曹操が陣の機を窺ひハハ
皆船筏を用意仕りハハ馬超が曰く曹操固く陣屋を守
りて出て戦ひをせざるハ船筏を備へて渭水の河を渡り北
より攻て吾後を襲ハハ爲あり我今其計事を知れり一手の
勢を以て河に傍て北の岸に陣を取バ曹操必ら走渡る事を

得ずして二十日より内に河東ことく兵糧盡て自ら亂
るべし其時河南より攻か、らバ曹操忽ち手取あるべし
韓遂が曰く此計事よしと雖も兵法に兵半渡可討といへ
り如ト兵を引て南の岸より攻か、らば曹操が勢ことく
く河中に亡ふべし馬超大いに喜び此計事甚だよしとて
急ぎ兵を輔へ問者を以て曹操が河を渡る時刻を窺しむ此
時曹操ハ大軍を三手に分備を推て渭水の岸に臨みけれバ
夜も若々と曉て日の光漸く出たり先陣先河を渡つて北の
岸に上り速かに陣屋を作れバ曹操尙南の岸に残りて諸軍
勢の渡し果んまぞとて護衛の兵僅かに百餘人を從へ胡床
に腰をかけ手に劍を執て相待處に忽ち一人走り來り後よ
り白き袍を被たる大將此所へ攻來ると呼ハハ諸人皆馬
超あらん事を畏れ俄に上を下へと躁動し我先に船に乗ん
ど喚き叫んで休ざりけれども曹操ハ少しも躁がせ船床の
上に坐して御方を制し驚く事あかれと下知する處に後よ
り馬烟天を捲ひ喊の聲地を動かし西涼の軍勢潮の湧か如

く巳に間近く攻来れり時に船の上より一人の大將馳回り
敵巳に近付ていに丞相何とて船に召れぬ口とす曹操
足を見れば許褚あり敵来るとも何程の事かあらんといふ
て後を顧みるに馬超龐徳巳に百歩許りにありければ許褚
是非なく曹操を擁立船に乗んとするに船巳に一丈餘り岸
を離れたり許褚の事急あるを見て曹操を背に負一躍に
船を飛乗り巳に船を出しければ跡に後れたる者どもこ
となく河中に飛遷り泳ぎ付て僅ある船に込乗ければ其
船巳に翻らんと許褚刀を掲げて近付ものを切拂ひければ
手足を蹴られて溺れ死する者幾千万といふ事を知り許褚
自ら棒を以て船を篙さし北を指て渡らんとすれども水
の流急にして一所にのみ洶れければ曹操腹を冷して許褚
が脚下にすくみ居り馬超巳に岸に近付曹操が船の河中
まで出たるを見て強弓の精兵に命じ河を遶りて散々に射
させたれば其矢雨よりも猶しげし許褚の曹操に矢の中ら
ん事を恐れ左の手に馬の鞭を持て矢を防ぎ右の手に篙を

使ひ臂を張て我に中る矢を鎧の袖に受とめければ船の上
ある者ども馬超が射る矢に一ツも逃れず四五人水中に
射落さる水は急なり横ざり渡る船なれば岸に着こと成が
たく見へけるに許褚一人勇力を振ひ兩の膀を夾んで
之を使ひ左の手に馬の鞭を持右の手に船を掉して兎角し
て難を遁る時に渭南の縣令丁斐といふ者あり南山の上に
陣を取けるが西涼の軍勢手繁く曹操を趕かくるを見て必
ら曹操が討れん事を畏れ我陣中に貯へたる牛馬をこと
なく驅出して野にも山にも放ちければ西涼の軍勢之を
見て争ふて牛馬を取俄に徳付さる心地して急に曹操を追
んどもせせ此故に曹操危き命を助かり漸々に難を逃れて
北なる岸へ上りけり先陣に渡したる者ども跡に軍ありて
丞相難に遇玉ふと告るを聞て急に船筏を回して救へんと
すれば曹操巳に岸に上れり許褚痛手を負て鎧に立たる矢
簀の毛の如くなりければ諸人助けて陣屋の中へ入しむ諸
將盡く來り集り驚き怖れて地に拜伏し資休恙なきやと

問ければ曹操笑つて曰く我今日敵の爲に困められたりと
て少しも怖れたる氣色看へざりしかば諸人皆大いふ驚く
曹操が曰く我危きを見て驚しく牛馬を放つものあり若此
計事をなして敵を誘くもあらざんば敵必ず力を盡して河
を渡つて追掛べし抑も牛馬を放ちたる者何人ぞ一人答
へて曰く渭南の縣令領兵官丁斐なり曹操即ち丁斐を呼ぶ
若御邊の計事にあらざんば我必らず擒にせられんと云て
典軍校尉に封ず丁斐が曰く敵巳に引退くとすせども明日
へ又來るべし宜しく計事を設けて拒ぎ玉へ曹操が曰く我
巳に敵を防ぐの計事ありとて諸の大將を招き手分を定
め河の邊に堤を築せ假に陣屋を掛双べて敵若來らば御方
の勢を堤の外へ伏て内に應しく旗幟を建て疑兵をかし
別に岸の邊に壘を深く堀上に柵を蓋ふて土を布き備ある
兵を出して敵と敵を引よせ壘に陥入て盡くところを一度
に出て討べしとて夜中より用意して待かけり去程に馬超
の曹操を討渡し本陣に回りに韓遂に見へ今日の軍に巳に

曹操を生捉べかりしを一人勇力の大將曹操を負て船に乗
遂に助けて北なる岸に上れり其働き凡夫のわざもあらせ
と語りければ韓遂がける曹操が旗下に虎衛の軍とて一
手の勢あるを聞り是は國々の兵者の中より殊更勝れて強
く壯なる者を選び出して大將二人に命じて之を領せし
む其大將の一人陳留巴吾の人に典章といふ者よく鐵の戟
を使ひ重さ八十斤にして何も左右の手に掲げ直ち敵の
中へ切て入けるが此人の巳に亡びて今謀國の人に許褚と
いふ者あり其力よく走る牛を尾を以て引戻す世の人之を
驚して虎癡といひ又ハ虎侯とも呼ぶ今日曹操を救へる者
ハ必らず此許褚ならん若此者に出合玉ハ必らず輕やし
く戦ひ玉ふ馬超が曰く某も久しく許褚が名を聞及べ
り韓遂が曰く今曹操河を渡りて我後を攻んとす速かよ之
を擊破るべし若延引して要害ハ陣屋を造らば其時急にハ
退け難し馬超が曰く我只よく北岸を拒いで兵者に河を渡
らしむべからん是最上の計事なり韓遂が曰く御邊ハ跡に

残りて本陣を守り玉へ昇自ら打向つて曹操を破るべし馬超が曰く然らば龐徳を先手として速かに推許玉へ轉送乃ち龐徳と五萬の精兵を率し直ちに涪南に向ひければ曹操兼て討し如く値ある兵を出して敵を勝く龐徳の西涼の若武者千餘騎を引つて少しもためらはず先手に進み賊を遣りて城たりけるが想ひも許す人馬ごとく陥坑に陥入て上を下へと盡し龐徳一人は跳り出て地の上に立曹操が大軍之を見て一同に競ひ蒐りければ龐徳少しも怖れず近付敵十騎餘りを斬りて落し困を打破つて静々と歩み出るに追躰んとする者更にかし大將韓遂敵の大勢に圍まれて出る事能はざりければ龐徳又取返して救んとするに曹仁が手下の大將曹永といふ者に出合只一刀に斬殺して其馬を奪ひ大勢の中へ窺入て了に韓遂を救ひ出し東南の方に向つて走りける曹操に乘て追掛ければ馬超兵を引つて討て出御方を救ふて曹操を防ぎ又入亂れて攻戦ひ暮に及んで曹操退いて回りけり馬超の敗軍を収めて手負討死を

討るに入組の大將程銀張横二人陥坑にて討れ其他手下の者二百餘人亡びたり馬超が曰く若くは様の体にて日を送り涪水の北に曹操が陣屋成就せば急に中々破り難からん如す今夜輕々と驍馬の兵を率し曹操が野陣を討て斃すべし韓遂が曰く宜しく手分を定めて前後を救ひ他人に任せ玉ふ事あかれ馬超實もて自ら先手に進んで馬超龐徳を後備とし夜討の用意をせたりける曹操は今日適戦ひ勝て兵を収めて涪水の北に回り諸の大將を呼よせ敵打負て逃たりと雖も討れたる勢多からざれば必ず我陣屋の立ざるを疑ぎ今夜來つて野陣を却すべし四方に兵を伏て中軍にの慮しく旗許りを立置鉄砲を鳴すを相圖に盡く出づ一戦して擒にすべしと云ければ諸將兵を伏て今や來るを待處に案の如く馬超六里の路を離れて大將成宜に三十騎を付敵の体を窺しむ成宜忍び入て其邊を見るに更に人わりとも看へざりければ直ち中軍へ打入けるよ曹操看すまして合圖の鉄砲を鳴す之を聞て四方の伏勢一度に起

り引包んで攻さうりければ成宜已に夏侯淵討れ三十騎の兵者ごとく討死す時に馬超が先陣喊を造りて推よせ龐徳馬岱大軍を引て三方より攻かり喚き叫んで火を散し入亂れて戦ひけるが互ひよ若干討れて曉方に軍を收め馬超の涪水に傍て陣を取日夜に兵を出して攻戦ひ暮やしと勝負もあかりけり

○許褚赤裸きて馬超と戦ふ

曹操の涪水の北に在て陣屋を造らんとするに馬超西涼の精兵を引て日夜を分たせ推許其勢以雷電の如くなれば曹操が勢日を重ぬれども陣屋の要害未だなら野陣を取て防ぎ戦ひしかば行ては始終思かるべしとて俄か船筏を以て涪水の流に浮橋をかけ南の岸へ相通じて三ヶ處に構へ曹仁兵を下知して河の中を夾み南北の岸に陣屋を建んとて夥しく材木を運び先兵糧の車を以て四方を圍み諸軍其中に陣を取て心静み城を築んとす西涼の兵之を見て馬超に此由を告げれば馬超兵を命じて手毎に乾ける柴を持

せ硫黄焰硝の類ひを帯て馬超が旗を韓遂に指せ韓遂が旗を馬超に指せ二人南北に分れて毎日曹操が陣を推許草を積柴を集めて火をつけ散々攻ければ曹操防ぎ事を得ず陣を棄て走りけるよ三ヶ所を構へたる浮橋並び兵糧の車ごとく焼て西涼の軍勢大いに打勝南の岸に陣を取て涪水の流を截住す曹操陣屋を造ると雖もケ様に皆打敗られければ心の内憂ひ怖れ諸將を集めて計事を論す荀攸が曰く涪水の邊の土を以て築地を構へ堅く守りて戦ふべし曹操然るべしとて人夫三萬人を遣し土を擔ひ運んで築地を四方に構へんとすれば馬超之を聞つけて龐徳馬岱に各五百騎づつを付往來飛が如くに窺たりければ曹操之を防ぎかね殊に大河の畔の土を以て築き築んとする築地なれば小石雜りの飄沙にて盡く崩れ倒る之に依て計事極り如何せん心苦め時に九月も末に至つて北國の習ひなれば天氣甚だ冷じく彤雲四方に布て數日未だ明けざりしゆゑ兩軍暫く戦ひを休て雪の晴るを相待ける曹操は

諸將を策めて計事を議する所に忽ち一人の老翁來りて對面せん事を求む乃ち呼入て之を看るに人となり常に替りて上長ふして下短く鶴骨松姿其形凡ならず何なる人ぞと問ハ本京光の人よて終南山に隱居する童子伯道号ハ鶴梅居士といふ者なりと答ふ曹操客の禮を以て敬ひければ老翁が曰く丞相久しく涪水の北に城を築かんとし玉ふを開何ぞ時よ乘て用ひ玉のさる曹操が曰く小石雜りの砂なるゆゑ如何に築くとも求だちら老翁如何なる計事かある願くハ教玉へ老翁が曰く丞相の兵を用ひ玉ふ事神に通せらぬが如し何ぞ天の時を知玉のさるや々様久しく陰雲蓋ふて雲の降る事烈しければ若朔風吹起らば必らず大いよ凍るべし其風の起るを待て急に土を運び水を澆ぎ玉ハ一夜の内に築地堅固に備らん曹操之を聞いて心悟り大いに喜び拜謝して老翁を留め置置く恩賞せんと云ければ老翁一ツも受ず袖を拂つて去にけり其夜案よ進ハ北風俄に吹起り凜々として烈しかりければ曹操之ぞ待處の夜なり

りて大軍を以て土を運び城の裏に水を盛て其上に澆ぎたれば築くに隨つて盡く凍り固まり夜の明方ハ水も沙と一面になつて究竟の城已に成就せり西涼の敵軍遙に城を望み見て皆怪しみ驚き神の助けあらんと膽を冷とされども此儘にて開かば始終よかるまじ只蒐て看よとて馬超西涼の大軍を率し敵を打撃し叫んで進よける曹操ハ老翁の教に因て城已に成就しければ心の内深く喜び自ら馬を乗出して許褚一人後に從ふ曹操鞭をわけて呼ひりけるハ曹操相只一騎自ら馬を出して此にあり馬超出來れ一言をいハん馬超之を聞て鎗を横たへて馬を出しければ曹操が曰く汝此間御方の城のあらざるを驚かしが一夜の内に天より之を築き玉へり何ぞ早々に降参せざる馬超大いに怒り牙を咬で深く恨を走り掛つて曹操を突殺さんと思へども曹操が後に眼裏圓にして光百練の鏡に朱をさしたるが如きの大將手に刀を掲げ馬に白沫かませせて立ければ是ハ聞ゆる大力虎侯と呼はるハ許褚あるならんと思ひて肯て

輕々しくハ進み得老乃ち鞭を揚て汝が軍中に虎侯と呼ぶ者ありと聞しが今何くハか逃去たると問ハ曹操が曰く我虎痴許褚といふ大將あり何ぞ天下の風を憚らん馬超聞もわへき突て蒐らんとする氣色に見へければ曹操が後より一人馬を乗出し我ハ乃ち灑郡の許褚ありと呼はる風風ありたりと拂つて眼の光星の如くかれハ馬超も必にや怕れたりけん敢て前ハ進んともせず了に馬を返して退きければ曹操も又引て回る兩方の軍勢之を見て驟然たらずと云ものあく身の毛よだつて怕れあへり曹操諸の大將に向つて敵も御方に許褚ある事を知誠に我虎侯ありと云ければ許褚が曰く某明日必ら老馬超を生捕ん曹操が曰く馬超が勇力輕々しく敵する事なけれ許褚が曰く某搦つて勝負を決せんとて使を以て戰書を送り虎侯明日馬超と戦ひを决せんと云遣しければ馬超是を聞て大いに怒り何ぞて斯我を欺く我必らず虎侯を殺んとて即時に批回し次の日兩方の軍勢こどく出て陣勢をはる馬超ハ龍徳を左備



とし馬倭を右備とし韓遂に中軍を領せしめ自ら鎗を掲げ
て馬を馳らせ虎侯の何とて出ぬぞ快よく出て勝負せよと
呼のりけれバ曹操之を見て 諸の大將を顧み馬超の呂布
が勇ま減らさ誰かよく敵せんと云けれバ許褚も肯ず馬
を躍らせ刀を舞して苑出馬超と只二人大いに百餘合戦ひ
馬疲れけれバ共に軍中に入て馬を棄替又討て出て百合わ
まり戦ひしかども勝負の色看へざりしかバ許褚腹を立て
軍中に馳回り甲盔を脱棄 袍を解て赤裸になり馬に打乗
て苑出馬超と火を散して戦ひければ兩方の軍勢膠ひ膠く
又二人三十餘合戦ひ許褚威を振ひ勇を逞うして刀を擧て
ハタと砍バ馬超身を倒めて之をさけ鎗を取のバ許褚が胸
板を突んとすに許褚之をさけて其鎗を脇に狭み刀を地
に棄鎗を奪いんとすれば馬超奮ハれじと曳合はばに許褚
喚く霹雷の如く丁に中より拙折て手本僅かに馬超が方に
残り散々に打合たり曹操之を見て許褚が失ちあらん事を
恐れ夏侯淵曹洪に兵を引て出よと下知すれを龐徳馬岱其

気色を見て左右の備を一手に合せ面も振す討て入其勢ひ
龍光の如くあれバ曹操が勢大いに亂れて許褚も臂に矢二
筋射付られ皆城中へ逃入れバ馬超追討に城の邊まで攻
付戦ひ膠て退さける曹操の懸しく兵を討れ緊しく守りて
出ざりけれバ馬超も本陣に回りに韓遂に申しけるハ我惡
戦する者を看たれども丁に許褚が如き者を看ず是眞に虎
侯なりと感トける曹操ハ馬超を破るべき計事なく兼て徐
晃朱靈に四千餘騎を付て忍んで渭水の河より西に伏置た
れバ密に使を遣して早く敵の後より攻苑れ我大軍を以て
前より苑り夾んで討んと下知をさす時に馬超數百騎を引
て推寄往來馬を飛せて勇を奮ひ威を耀しけれバ曹操矢倉
の上より之を見て盔を地に抛て申けるハ馬超ハ尋常の敵
にわらず奴が世にあらん限りハ吾如何して心を安んぞる
事を得ん死して身を葬るの地もあかるべし夏侯淵之を開
て安からぬ事か御方の大將數を知さる中に馬超ハ敵す
る者あくして丞相の心を安からざらしむ 某擡つて命を

此處に棄馬超と共に討死せんと呼のり遂に手下の兵千餘
騎を率して門を開いて出けれバ曹操急よ止むれども耳よ
も聞入き一陣に備を立て薄地暗に蒐りしかバ曹操も其失
ちあらん事を恐れ自ら馬に乗て盡く討て出たり馬超は敵
の出るを見て急に引回して後備を先手とし陣勢を開き張
夏侯淵馬を飛して來りけれバ馬超鎗を燃りて突て出大勢
の中へ蒐入て散々に戦ひけるが忽ち曹操を見付て馬を飛
して蒐りけれバ曹操腹を冷し馬を回して城中へ逃走る馬
超精兵を驅て追討に攻たりしかバ曹操大半討れて散々に
成にけり馬超ハ馬を飛して曹操を追蒐る所に騎より兵者
走り付曹操忍んで一手の勢を蒲阪津より渡し渭水の西に
陣屋を構へて吾回る道を塞げりと告けれバ馬超大いに驚
き急に本陣に歸りて韓遂と相議し今曹操が勢忍んで吾後
へ廻れり前後敵を受けて拒ぐべき便さしと云けれバ大將李
湛が曰く如し是まで攻取たる地を曹操に返し與へ和睦を
請て戦ひを休春の暖あるを待て別に計事を成玉へ韓遂が

曰く此計事甚だ好早く使を遣し玉へ馬超猶豫して心未だ
決せざりければ大將楊秋侯選二人頻りに和睦をし玉へと
勸む之に依て遂に楊秋を使として曹操が陣に遣し韓遂馬
超地を割て和睦し再び境を犯す事あからんとて書簡を送
りけれバ曹操が曰く汝且回れ吾明日使を以て答ふべし
楊秋已に回りにけれバ買明來りて曹操に見へて曰く今馬超
和睦を求む丞相の御心如何曹操が曰く先汝が意見を聞ん
買明が曰く兵ハ不厭詐とこそやせ偽りて和睦を許し後
又問隙の計事を用て韓遂馬超とが心を疑はせば一敷して
破りつべし曹操足を懸て笑つて申けるハ天下の高見ハ必
走多く相合今御邊が計事ハ乃ち吾心腹の機密あり外に泄
す事あかれとて即時に使を遣し和睦を求むる上ハ別事あ
し我も心靜に兵を收めて都に回るべし早く汝が取たる河
より西の地を回せとて返簡を送り乃ち手下の兵に下知を
傳へて南の岸へ浮橋をかけさせ軍を退くるの気色をさす
馬超此由を聞て韓遂に向つて曰く今曹操和睦せんと約を

あし浮橋をかけて都に回るの体を見せると雖も彼本より
森羅にして詐りの謀事極めて多し尙其の和陸ありとて油
断せば反つて大いなる敗を取ん曹操が大將徐晃朱靈二人
渭水の河西に在て陣を取之も用心せざり叶ふまじ某と
將軍と一日ツ、代りて今日曹操が方を守りて、次の日の
徐晃が方を守り兵者を分て前後に備彼が詐りを防ぐべし
とて用心少しも怠らず

○馬超五將と歩戦す

馬超韓遂二人二手に別れて前後を守り和陸の詐りあらん
事を用心するよし曹操が陣に聞へければ曹操笑つて買明
にやけるの我計事成就せりとて問者を以て窺ひしむるに
明日の韓遂此方を守り馬超自ら徐晃が方を守ると告げれ
ば次の日曹操諸の大將を引て陣屋を出影しく武具を
揃へて只一騎進み出たり西涼の軍勢未だ曹操を目よ見ざ
る者ありければ我もくと出て之を見るよ曹操錦の袍
を被て駿馬に跨り大音あげて汝等西涼の勢曹丞相を見ん

或人此由を馬超に報す馬超は此日徐晃が方を守りて河よ
り西に居りしが此事を聞て早々に馳回り韓遂に問て曰
く今日曹操と馬と双べて何事をか語り玉ひし韓遂が曰く
只昔都にて共に遊びし事を語りしのみあり馬超が曰く
定めて合戦の事をすさぬ事ひまじ韓遂が曰く曹操只昔
の事を語りて合戦の事を云す我も又之を云すして退きた
り馬超心の内大いに疑ひあがら然れども出にけり曹操
の城中に回りて買明を呼で曰く汝今日の計事を知たるか
買明が曰く我今日の計事を看るに尤も奇妙なりしかしあ
がら猶未だ足さ某一つの計事あり馬超と韓遂どが心を
疑せて互ひに自ら誓せしめん曹操喜んで曰く願くば聞ん
買明が曰く馬超の血氣の勇にして計事の大事を知す丞相
自ら書簡を封じて韓遂に送り其内の文字を讀んで肝
要と覺しき處の或の刊りて書改め又ハ韓遂を欺て
街に歸りよく封じて韓遂が陣に遣し玉ハ韓遂之を見て
心驚き怪まん然る時ハ馬超其氣色を窺ひ必さ書簡を求

と思ふか吾も是常の人あり目四ツあるに有す口兩あるよ
有す世の人に異りたるハ只智謀の深きのみありと呼ハリ
ければ西涼の勢皆怖れ驚く曹操人を韓遂が陣に遣し我韓
遂將軍と元より少しも恨み共古の故人たりしが一
旦事の變に依て心ならず合戦に及べり今戦ひを止和陸す
る上の向後の遺憾少しもいはず已に兵を收めて共に本國
へ回らんとす願くば只一人之へ御出いへ我も甲を棄刀を
解て一人本陣を出て對面せんと云遣しければ韓遂自ら甲
をも被さ曹操が陣の前に出たり曹操近々馬をよせ煉鐵
の情を述て申けるハ吾將軍の父と共に孝廉に擧られ吾叔
父の體を以て之に事へたり我又將軍と共に官に進を覺へ
ず年月を送りたりしを將軍今ハ幾干ぞ韓遂答へて曰く
某已に四十歳あり曹操が曰く昔都にて共に青春の少年
たりし時風景を尋ねて興ある遊びをなしけるが早中老に
成けるが何か天下の太平を得て共に心易く樂むべしとて
昔今の物語に一時餘り馬を双べ大いに笑つて別れければ

めて之を看るべし若肝要なる處を書改めたるを看れば必ず
深く韓遂を疑ひ我に知せしと斯改めたりと思ふべし然る
韓の向に馬を双べて物贈し玉ひし計事によく應じて馬超
が心の内疑ひ怪むべし疑ふ時ハ陣中必さ亂を生さ其亂に
乘じて密かに間諜の計事を行ひ韓遂が手下の大將を御方
に懐けて必ず馬超を捕へし曹操手を打て喜び即時に自
ら書簡を韓へ事の有べしと思しき處を改めよく封
じて懸を怪げなる使を仕立韓遂が陣に遣して馬超が聞し
る機にぞしたりける案の如く此事を馬超に告る者あり只
今怪しげある人よく封じたる書簡を持て韓將軍の陣に來
れり云ければ馬超甚だ猜ひ逕ちに韓遂が陣に行て問て
曰く今書簡の來りハ如何なる故ぞ韓遂が曰く只曹操が
書信を通ずる書簡なり馬超其書簡を求めて開き看るに諸
處を刊りて書改め故わらんと思ふ處讀んで定かなら
ざりければ怪みて問て曰く何故に斯文字を改め玉ひし韓
遂が曰く我其故を知原より斯の如くにして送り來れり

馬超が曰く何ぞ草稿を以て人に送るといふ事あらん是の
 必ず我等が来りて看ん事を怕れて早く書改めて置玉ふあ
 らん韓遂が曰く御邊何故に疑ひ玉ふぞ推量するに曹操誤
 りて草稿を封じて送るあらん馬超が曰く我心更に解さ曹
 操の容易に事をなさず世々双びなき英雄なり何ぞ錯りて
 草稿を送るべき我本誓つて汝と力て併せ共に曹賊を討ん
 と約せり今何とて心を變じたる韓遂が曰く御邊さほどに
 我を疑ひ明日我陣を出て曹操を呼んで對面せんと昨二
 人先日のおく馬を双べて語るべし御邊の傍らに竊居て只
 一鎗に曹操を突殺し玉へ然る時ハ我心の信を露すなら
 ん馬超が曰く若然らば我心の疑ひを晴すべし次の日韓遂
 自ら李進樂典馬玩楊秋侯選かんを従へ馬超を傍らに伏
 て人を曹操が陣に遣し韓遂將軍願くハ曹丞相に對面せ
 ん自ら馬を出し玉へと云けれハ曹操之を聞て曹洪を呼ぶ
 密に計事を低附けるに曹洪計事を受自ら數十騎を引て陣
 を出近々と韓遂が前により馬上より禮を施して曰く曹丞

相昨夜將軍の送り玉へる書簡の意を見て甚だ喜びをさし
 玉ふ必らき誤り玉ふと云すて馬を回して城中に入れ
 馬超此体を見ていよく怒り鎗を掲げて躍り出汝曹操
 と心を合せ我を欺いて殺さんとするかど云て韓遂に突て
 鎗を五人の大將通り止めて陣中に伴ひ回る韓遂再三詐
 りあきよしを雖も馬超更に信とせず大いに怒つて去けれ
 ばすべし機軸く五人の大將と此事を議するに楊秋が曰く
 馬超常に己が武勇に傲つて將軍を凌ぐ心あり若曹操に勝
 事を得れば却つて將軍を輕んぜべし某愚意を以て思ふに
 如じ曹操に降参して長く身の安さ事を量り玉へ韓遂が曰
 く我馬超が父と兄弟の好あり安んぞ曹操に降るべき楊秋
 が曰く馬騰都にて謀反を起し已に曹操に討れたり今將軍
 何故に逆臣の子を助け玉ふぞ韓遂が曰く然らば汝が意見
 に従ふべし誰か曹操に此由を報する者あらん楊秋が曰く
 某願くハ行んとて即時に曹簡を取て曹操が陣に行降参
 のよしを告けれハ曹操密かに喜び韓遂を西涼侯に封じ楊



秋を太守に封じて其外の大將ことごとく恩賞ありけれハ
 楊秋恩を謝して本陣に回り韓遂に逢て曹操が厚く敬よ
 しを語り今夜火を付て馬超を内外より攻曹操が兵者を引
 入て共に馬超を生捕んと云けれハ韓遂大いに喜び潜に曹
 操と合圖を定め乾たる柴を用意して兵者の手分を備へ五
 人の大將も劍を帯て側らに侍立し酒宴を設けて馬超を招
 き席上にて殺すべしとて計事を定めけるが馬超元より心
 に疑ひをさせハ招くとも輕々しく來らじ如何よ計事や
 あるとて相共に評定す曹操ハ火の手を揚るを合圖にこと
 ごとく窺れとて騎馬の精兵を處々の詰りく伏置今や
 くと待窺たり馬超ハ心の内に深く韓遂を疑ひ兼て問者
 を付て窺ハせけるに今日の氣色直事あらせとて急に告來
 りけり馬超之を聞て心怒り即時に龐德馬岱を呼汝等軍馬
 を備へて用心せよ必ず事の急なる事あらんと云處に又一
 人走り來り只今韓將軍五人の大將と曹操に降参し將軍を
 殺さんと計りしを告けれハ馬超いよく怒り自ら五六騎

を従へ龍德馬岱を援備として韓遂が陣に行馬より飛下り
油幕の内を看れば韓遂五人の大將と計事を相談して楊秋
サけるの事延引すべから速かに行ふべし馬超堪へせ細
を扱て躍り龍り賊等何故に我を害せんとの料をどと云て
韓遂が眞甲を破らんとするに韓遂大いに驚き左の手を以
て拒がんとするれば其手肩より斬落されたり五人の大將皆
刀を提げて討て龍りければ馬超退いて油幕の外に出火を
敷して攻めんと五人の大將馬超を圍んで喚き叫んで戦ひけ
るが馮玩已に馬超に斬れて死にける四人の大將尚退かを
驅ひければ馬超勇を振つて又梁輿を斬倒す殺る三人の大
將之に怖れて逃去ければ馬超又油幕の中に入韓遂が首を
取んとするに諸軍救ふて已に外に出たり此に因て油幕の
外へ飛出ければ忽ち二ヶ所に火の手を揚て賊の聲大いよ
振ふ馬超已に馬に乗て四方を見れば限りなき大軍四角八
方より淵谷出龍德馬岱を散々や戦ふ時より四方より火をか
け鉄砲地に響いて曹操が勢亂れ入る馬超膽を冷し兵を引

て驚出んとすれば許褚眞先より打て龍り後より徐晃左よ
り夏候淵右より曹洪湖の湧が如くに攻来り搶取めて餘
さじと揉たりしかば西涼の勢大いに亂れて討る、者數を
知す馬超の大勢に龍隔られ龍德馬岱も見へざりければ自
ら百騎許りを引て渭水の橋に驚出たり時に夜も若々と明
て西涼の大將李堪一軍を引て馬超を討んと追來る馬超之
を見て馬を取て回し鎗を燃つて龍りければ李堪怖れて逃
走る時に曹操が大將于禁背より攻来り弓を扱て馬超を射
たりしが馬超早く鼓音を聞身を倒めて避ければ其矢射超
をチャット射超て前ある李堪が背に中り馬より倒に落て死
にける馬超之を見て急に馬を回して又于禁に突て龍れば
于禁怖れて逃走る馬超橋の上に陣を取龍り龍の御方を待
合せんばすれば曹操が大軍前後より環着許褚自ら虎衝の
軍を引て眞先に進み雨の降如く矢を放つに馬超鎗を以て
打落して恰も龍の飛が如し馬超兵を引て半の河に流り勇
を振ひ力を盡して討破らんとする事六七度に及びしかば

も敵の圍厚ければ叶はずして又橋の上に引回す曹操の大
軍次第に近付聲をつるべ放つて漸く危く看へければ馬
超チャット喚いて大勢の中に突て入る相従ふ西涼の勢皆諸
々に隔てられてことごとく討れしかば馬超逆も逃れぬ所
と思ひ只一騎大勢を龍破り路を尋ねて出んとするに督に
射られて馬より落已に討れぬべく看へたる所に忽ち西北
の方より一手の勢殺倒し眞先に進ひ龍德馬岱あり馬超
を救ふて馬に乗せ一方を打破りて西を指て落行ければ曹
操此由を聞いて曰く馬超が兵者いかに難かありし一人答
へて曰く千騎にの過ひのじ曹操が曰く然らば何程の事か
あらん汝等諸の大將日夜を分たす急に追掛て討とれ若
其首を取來らば千金を賞し萬戸侯に封せん生取來らば大
將軍の次とせん意る事かかれと下知しければ諸の大將
我先にと追かけ賊の聲天地を碎く馬超の身も疲れ馬弱り
て拒ぐべき力なく相従ふ兵も次第に減じ歩立ある者共
のこどどく活取らる曹操が大將跡を慕ふ急に追かけ

しかば又取て回して大いに戦ひ驚出て御方を看れば只三
十騎に打あさる龍德馬岱の散々に揉立られ龍西臨眺を望
でん逃去ければ曹操自ら安定まで追かけ馬超が遠く落延
たるを見て兵を収めて引回し已に長安まで来りければ都
より荀彧が早馬到來し早く兵を収めて回玉へと催促す
之に依て曹操諸の大將を呼集めけるに韓遂の左の手を
斬落されて殘疾の人となる曹操乃ち西涼侯の職を授けて
長安に留め龍德馬岱等を選等を列侯に封じて渭水の口を守ら
せける時に涼州の參軍揚阜字の義山といふ者あり本天水
郡の人なり長安に來りて曹操に見へて曰く馬超の韓信英
布が勇ありて深く羌胡の心を得たり今棄てて根を絶玉
はずんば他日氣力を養ひて又大いに漫らん願くば丞相よ
く思ひ玉へ曹操が曰く我久しく此所に在て都の中心元を
く南方に事多し久しく此に留るべから老御邊よく我爲に
西涼州を守れ揚阜が曰く尊命争でか背く事を得ん此に章
康とやす人あり若之を以て涼州の刺史とし某と共に兵

を領して冀城を守らば馬超自づから亡ぶべし曹操然るべしと許しければ揚阜が曰く丞相今都に回り玉ふとも大勢を長安に残し留めて後日の援けとし玉ふべし曹操が曰く我已に其備あり汝心を費んせよと云ければ揚阜別れて出にけり 諸の大將問て曰く初め馬超が勢遼關に據て渭水の北の路絶たり丞相河の東より馮翊を擊玉はず反りて逆關を守りて徒らに日を送り後に河より北に渡りて陣屋を遣り固く守りて勳玉はざるの何故ぞ願くば教玉へ曹操が曰く馬超始め遼關を守る我若直ちに河より東に向ひおば馬超が勢よく諸所の渡りを守らん然る時の河西へ渡る事能はば我是故に盡く兵を引て偏に遼關を攻る体をあし馬超に力を盡して南を守らしむ此に因て河より西にの敵思ひも密守る兵をも置ざりしゆゑ徐晃朱靈容易く渡りて敵の後を遮る事を得たり我其後北に渡り車を運ねて陣を構へ岸に傍て堤を築せ水の城を築いて敵に我弱さを知らせ其心を驕しめて其備を弱くし以て問隙の計事を用ひて

よく兵者の力を養ひ一旦之を打て敵に膽を冷さしむ怯疾雷不レ及レ掩レ耳と云の計事あり兵を用ふるの變化一道を以て論じ難し諸將又問て曰く丞相初め敵の大勢加ふるを聞て喜び玉ひしは如何あるゆゑぞ曹操が曰く涼州の國遙に隔りて地險阻あれば動もすれば王化に背く此故に征伐せんとするに要害堅固にして一二年に平げ難し今こゝとなく來り聚ると雖も人の心一から走兵多く大將累のしければ陣中治らずして一戰に滅ぶべし我此故に喜びたり諸將拜謝して曰く丞相の機謀尋常の及ぶ處にあらざり操が曰く我諸將の力を頼んで幸ひに勝事を得たりとて重く恩賞を施し夏侯淵を長安に留めて境を守らせければ夏侯淵が曰く某命を受けて此所を守る馮翊高陵の人に張既字の徳容といふ人あり之を川ひて京兆の尹とし共に長安を守るべし曹操然るべしとて即時に張既を召出して京兆の尹とし兵を收めて都に回りければ獻帝自ら驚輿に召れ廓を出て迎へ玉ひ曹操を貴んで贊拜に名を云は朝に入て

趨らせ劍を帶履を踏で殿に上り漢の相國蕭何が如くせよと許し玉ひしかば曹操が威勢いよく振ふて内外皆怖れすべし事なり

繪本通俗三國志卷之二十四終

繪本通俗三國志
繪本忠義水滸傳

旧本五十册
新本十五册
旧本八十册
新本十六册

該二書每月一册、發兌各定價金三十錢
前金御申込ノ諸彦ハ賣渡金二十錢ニテ出版
ノ都度配付仕候也 但シ府外ハ郵稅六錢申受
府下賣捌所ハ茲ニ略スヲ以テ御最寄ニテ御求ノヲヒ

明治十六年八月二十七日出版御届

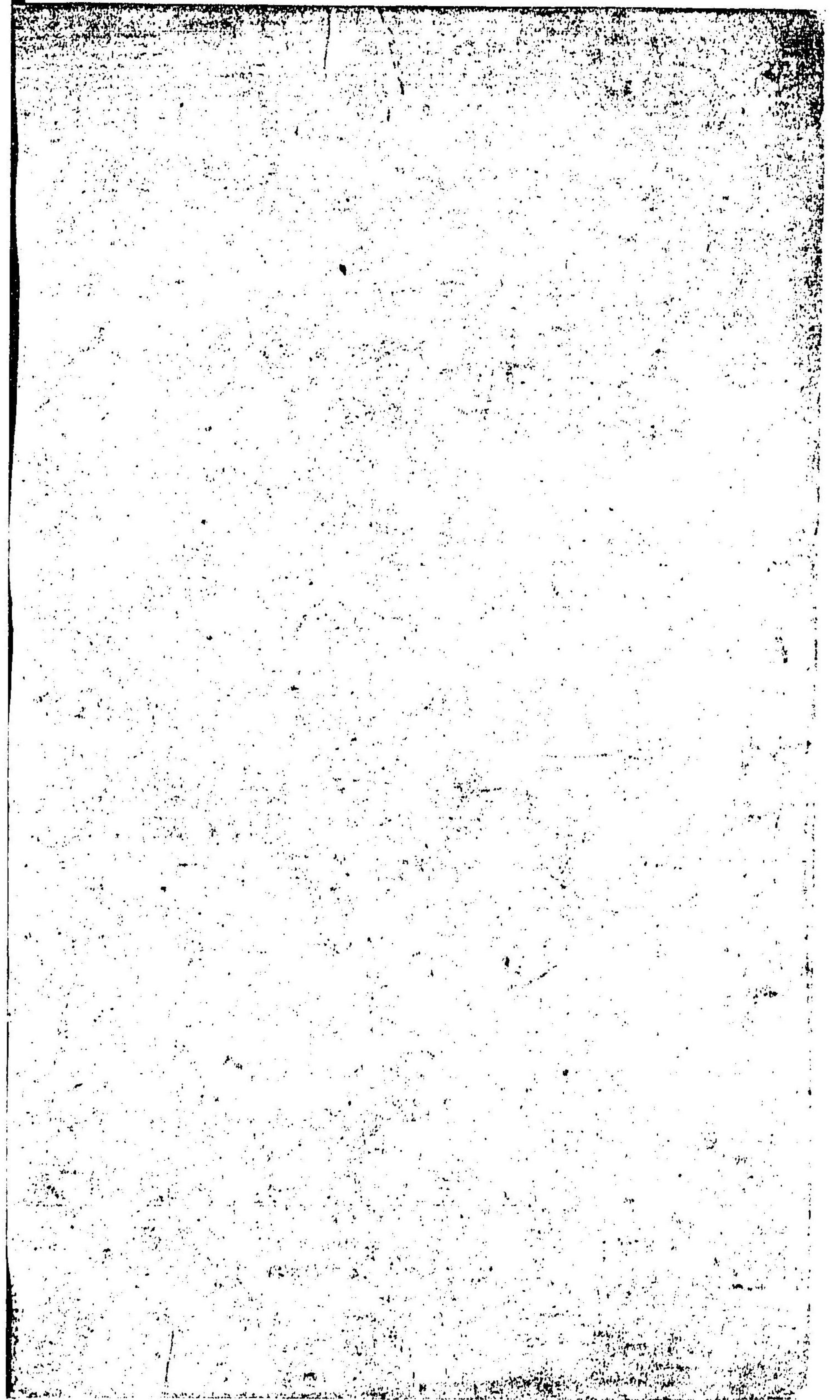
和解者共
出版人

東京府平民
清水市次郎

發兌元

著者可樂堂

芝罘月町三番地鉄道前



特40

21